

思想の科学

昭和37年3月17日国鉄東局特別扱承認雑誌第1283号/昭和34年3月20日第三種郵便物認可/昭和53年5月10日発行(臨時発行)通巻295
昭和53年4月21日国鉄首都増刊号承認第530号

No-91

●竹内好研究

「竹内好と臼田町」覚え書 井出孫六
佐久を思う(再録) 竹内好
北京・上海における竹内好の生活とその意味 幼方直吉
竹内好の魯迅新訳について 橋川文三
竹内さんに中国語を学ぶ 鶴見和子
国民文学論の行方 前田愛
竹内好と明治維新 市井三郎
竹内さんと「思想の科学」 大野力
竹内好と安保闘争 高島通敏
竹内好のその好き嫌い 安田武
竹内好の文体 鶴見俊輔
竹内好の方法原理 鈴木正
竹内好略年譜
竹内好批判論文・解題 しまね・きよし
反同時代人としての竹内好 津村喬

思い出 田中克己
判沢弘 宮内嘉久
白鳥邦夫 中村智子
金子勝昭 上野昂志
佐高信 小島正憲

葦津珍彦 中野清見
福地幸造 久米茂
巖 野添憲治
杳沢喜勝 中村輝子
小島正憲 加藤明登

5
1978
臨時増刊号

思想の科学社発行

昭和五十三年五月十日 発行(臨時発行)
昭和三十四年三月二十日 第三種郵便物認可
昭和三十七年三月十七日 国鉄東局特別扱承認雑誌第二二八三号
昭和五十三年四月二十一日 国鉄首都増刊号承認第五三〇号

思想の科学

一九七八年五月臨時号(通巻二九九号)

定価 五四〇円

筑摩書房

〒101 東京神田小川町2 ☎03(291)7651 振替東京6-4123

筑摩叢書

遊びと日本人 両地書

魯迅・許広平
竹内好・松枝茂夫訳

一九二五年から二九年までの魯迅と許広平との
一三五通の手紙。師弟間の応答に始まり、俗
な現実との闘いの中で、夫婦としてしっかり結
び合うまでの感銘深い内面の記録。1400円

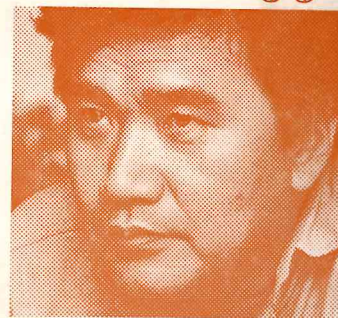
魯迅文集

竹内好個人訳
全6巻●完結

没後四十年、今なお「文学と革命」の原点であり続ける魯迅
文学の全体像 ①「呐喊」「彷徨」②「野草」「朝花夕拾」「故事新編」
③評論(一九一八～二六)④評論(一九二六～三〇)⑤評論(九
三一～三五)⑥評論(九三四～三六)
各2400円

共生への 原理 小田実

最新評論 / 1200円



●小田実の本
人間・ある個人 1100円
「生きたつづける」といふこと 1200円
二つの「世の中」 1300円
「殺すな」から 2000円
私と天皇 780円
私と朝鮮 1300円
日本の知識人 1000円

マキン、タラフ、沖繩、サイパン——
おびただしい死があり、おびただしい生がある
このどんづまりの現代、共に生きる原理を探る

◎編集者 「思想の科学」臨時号編集委員会 発行者 森山次夫 印刷所 株式会社光文社
発行所 東京都文京区後楽2-16-2 思想の科学社 電話813-1745 振替東京89072

ち

臨時号
1978 No. 91

●竹内好研究

- 「竹内好と白田町」覚え書 ● 井出孫六… 2
- 佐久を思う(再録) ● 竹内 好… 8
- 北京・上海における竹内好の生活とその意味 ● 幼方直吉…10
- 竹内好の魯迅新訳について ● 橋川文三…17
- 竹内さんに中国語を学ぶ ● 鶴見和子…24
- 国民文学論の行方 ● 前田 愛…30
- 竹内好と明治維新 ● 市井三郎…37
- 竹内さんと「思想の科学」 ● 大野 力…44
- 竹内好と安保闘争 ● 高島通敏…52
- 竹内好のその好き嫌い ● 安田 武…62
- 竹内好の文体 ● 鶴見俊輔…68
- 竹内好の方法原理 ● 鈴木 正…76
- 竹内好略年譜 ● …91
- 竹内好批判論文・解題 ● しまね・きよし…94
- 反同時代人としての竹内好 ● 津村 喬…104

-----思い出-----

- | | |
|----------|----------|
| 葦津珍彦…111 | 中野清見…114 |
| 田中克己…118 | 判沢 弘…121 |
| 福地幸造…124 | 久米 茂…127 |
| 宮内嘉久…131 | 白鳥邦夫…134 |
| 巖 浩…137 | 野添憲治…143 |
| 中村智子…146 | 金子勝昭…149 |
| 杳沢喜勝…152 | 中村輝子…155 |
| 上野昂志…158 | 佐高 信…161 |
| 小島正憲…164 | 加藤明登…166 |

編集後記 ● 168
表紙構成 ● 辻まこと



勁草書房

東京都文京区後楽 2-23-15
振替東京5-175253 ☎03-814-6861

竹内 好著

続魯迅雑記

〈魯迅とはわれわれにとって、いつたに何なのか。この問題を読者と話しよに考えたい〉、〈私は無理に読めとは言わない。しかし、魯迅でなければいけない、代替物がないという何か魯迅にはやはりある。日本文化はもうゆきづまって、開の道はない。…その時、前近代と、同時代の中では前衛的な部分を混在させた魯迅から、方法いかによっては打開のヒントを引き出せる〉こうした思いをこめた著者晩年の発言を集めた。好評の『新編魯迅雑記』続篇 一四〇〇円 200

- ### 吉本隆明全著作集(続) 全15巻
- 1 詩 集
 - 2 文学論 I 初期歌論
 - 3 文学論 II 詩論・文学論
 - 4 文学論 III 文学評論(1)
 - 5 文学論 IV 文学評論(2)
 - 6 作家論 I 源 実朝他
 - 7 作家論 II 古典詩人論
 - 8 作家論 III 書物の解体学他
 - 9 思想論 I 心的現象論総説
 - *10 思想論 II 情況・情況への発言
 - 11 思想論 III 言語の思想論
 - 12 思想家論 最後の観察他
 - 13 講演集
 - 14 対談集 I
 - 15 対談集 II
- *印・第一回配本内容見本呈

吉本隆明全著作集 全15巻

セツト価 二八一〇〇円

言語にとって美とはなにか (I-II) 各2000

思想の流儀と原則(対談集) 1300

新編魯迅雑記

復刊待望の名著『魯迅雑記』を中心に多くの初期エッセイを収録した。 一二〇〇円 160

現代中国論

現代中国を知るための古典的名著。 九八〇円 160

中国を知るために (I・II・III)

〈中国を知ることには日本を知ることに通じる〉 毎日出版文化賞受賞 各一五〇〇円 160

講座 現代芸術 第五巻

竹内好、鶴見俊輔他執筆 一四〇〇円 200

共同討議 対決の思想 文学的立場編

竹内好、丸山真男他出席 五五〇円 160

とりこむことは可能かな」と竹内さんは言っているが、フランス社会学や自主管理エコロジストの運動を見ると、まさにそれがはじまっているという気がするのだ。学生にはじまって労働者自主管理へ、そして全階層へという筋道において、フランスでは、毛沢東が一九一九年当時書いた「民衆の大連合」が可能となった。わが全共闘は、思想的には高度成長批判の、きわめて深い影響力をもった「第一撃」たりえたが、政治とのつきあい方においてつまずいた。より広い領域での、人民の政治、民衆の連合へと進んでいく代りに、党派の頭の中にある観念的な「政治」へとおよそ空虚に上昇することで、「全国全共闘」は全共闘の精神の戯画となった。そのために、今にいたるも「五・四以前」には違いない。

さきの対談にもう少しこだわれば、竹内さんは「戦後文学」にふれつつ、戦後文学は役目を終わった、大庭みな子などが出てくるのは、戦後文学が戦前文学になってしまった証拠で、「すべて戦後のつくりやつが戦後戦後といっているうちに戦前にぐるっと回転してしまった」と言う。新たな戦前の時代、ということはいろいろ言いかたでくりかえしてはいたはずだ。

「十五年戦争」という概念を私はさきに述べたような理由で、とらなない。あるいは、ある水準でしか成り立たないとみる。最近になって、「昭和経済五十年戦争」という考え方が出てきたが、戦前―戦後を連続でとらえる必要を、ますます感じている。私に興味があるのは「戦中と戦後の間」ではなく「戦後と戦前の間」である。

日中国交回復で、「十二月八日」以来引きのばされてきた敗戦が、一応カタをつけられた。ということは、まさに、新たな戦前の時代が

始まったということだ。うろ覚えだが、「中央公論」で話した時、竹内さんとその点で一致したように覚えている。その時だったか別の文章でだったか、竹内さんは、むしろ日中再戦が迫っているのだと言った。その点は私は首をかしげた。

「ロッキード」によって支配の側から「戦後」にカタをつけたあと、七七年になって、二〇〇カイルをめぐる反ソキャンペーンと、核燃料再処理をめぐる「資源小国」キャンペーンが出てきたときに、まさにぐるりと回転して戦前になった。ただし、日中再戦ではない。日中国交の延長上にあるのは、中国の「安保支持」であり、米日豪中同盟による抗ソ戦略だった。今年に入って、日本の支配層は決定的に「日ソ」から「日中」に傾斜するとともに、自衛隊は事実上の日中軍事提携さえ射程に入れて各種アドバルーンを挙げはじめた。詳しくは述べない。放談ととってよすがが、中国主導の大東亜共栄圏もどきさえありうるようになってきた。漂流する日本資本主義は、この枠組みの中で、もう一度国体を掲げてくるような気がする。「低成長」という負のイメージでは勝負にならないからだ。天皇退位―御一新への準備と、小林「宣長」の「国体の自己流出」とは無縁なはずがない。「天下大治」はまことにしんどい。

中国もじつはあまり変わらない、日本も変わらない、と竹内さんは言いつづけた。たしかに変わらないが、しかしこの新たな戦前が並大抵の既知の対応で済むこともなさそうだ。どのようにその対応をみつけるか、原則をつかみうるか、それが「五・四以後」への闘いの質ということであり、こんなに竹内さんに頼って引きあいに起きなくて済むようになるということなのだろう。

思い出

竹内さんの風格

葦津彦

竹内好さんは私の畏敬する文人であり、その風格は強い印象を残して、なつかしまれる。けれども竹内さんの思想的立場と私の立場とは異なっていたし、その主張は、時として相反することが少なくなかった。だから私の竹内さんの風格についての印象といっても、故人と思想的にも同じ立場で、親交のあった人々から見ると、ただ遠方から望見した者の一側面観にすぎないか、見当ちがいがもあるかもしれない。だが多くの知友にめぐまれた竹内さんの回想のなかに、立場を異にする者の遠方からの望見的印象も、存在していかもしれない。そんなことを考えながら、竹内さんとの往來を回想する。

初めてお会いしたのは、渋谷の旅館のような所での研究会だった。

十六、七年も前のことと思うが、市井三郎氏の紹介だった。私は竹内さんの評論は、いくつも読んでいた。竹内さんも、市井氏を通じて私の二、三の小論を見ておられた。竹内さんの中国に対する親愛の情は今さらに言うまでもないが、私の立場は、やや違っていた。私は少年時代から、しばしば中国に遊び、日中戦争中には日本人の暴戻にたいして痛憤したことも浅くはなかった。だが敗戦の後に、日本帝国主義断罪論が公式化されてしまうと私の思想が変わって来た。日本と中国との悲しい歴史を生んだ日本人側の罪はいまさら解消されるわけではないが、中国の民衆や指導者にも、この悲史を生み出す一半の責任があったのだと感ずるようになった。そのような立場からの史実を列記して、日中同罪論風の史論を書いていた。市井氏は、竹内さんを大変に畏敬し親愛していたが、日中近代史研究のために私との討論を期待したらしかった。私も討論するつもりで、多少のノートなども持参して、序論を三、四十分間も話した。その間、竹内さんは黙っていたが応答は案外だった。

「私は中国を専門的に研究して来たし、今の話や貴論で書かれたような史実や事情も知っている。だからあえて反論はしない。だが今の時代は、貴方の言われるのとは、反側面の事実を、徹底して日本人に知らせるように書くべき時だ、と私は思っている。史実論では、大した論争点もないようだ」と、あっさりしたものだ。

現代の日本人に、二つの側面のどちらを強く知らせるべきかと言う「時の判断」のちがいで、二側面の存在の事実についての認識では、さほどのちがいはないと言うので、討論は全く進行しないで終わった。だがその後には新橋などで夜食も共にして「時事」を語ると、全く相反することが少なくなかった。大きな声で「おれは全く反対だ」との語をしばしば聞いて議論した。議論すると剛直で堂々としていた。一片の卑怯さも感ぜられない。「時」の判断が対峙しているけれども、その底には、論敵の真意、真情も洞察し得るふかい知性を感じられた。それで討論した後でも、少しも嫌な感じがしないで、さわやかだった。

日中国交の回復に竹内さんは熱心だった。私は、もともと不熱心で、とくに田中、大平の外交進行には不快禁じがたく激情的に痛烈な反対論を書いた。私はそれに「貴方にとっては、日本人と中国人とが、いかなる人間の心情をもって交わるかは大切なことだと思ふ。しかし北京の政權と日本の政權とが、どんな法的条約交渉をするかについて、なんの意味を感じておられるのか」というような意味のことを書き添えておくれた。無回答だろうと思つたら、懇ろな回状で「政治論として私は、貴論に全く反対で、田中外交を支持する。しかし貴論のなかに大切な問題点があるのは、私も感じてゐる」というような意味だった。渋谷で初めてお会いした時の情況を想いおこした。

竹内さんは、東洋学者としての大川周明を高く評価されていた。間い合わせがあったので、資料など少しお世話したが、やがて英文の大川論がおくつて来た。正確には記憶しないが、大川の學問的業績を高く評価しながらも、大川が、ただ文献に依存して、生きた中国人社会

のナショナリストから人間的に学びえないで、過ちを犯したと言うようなことが書いてあった。その評は、一理あると思えたが、大川は語学もでき、異邦人との交際はよく、学者にしては交わりの広い人だった。私は竹内さんに「大川が文献に依存しすぎた」としたら、日本に文献依存過重でない、どんな中国学者があったのか」と質した。そして「それがまだないのです」との回書が来た。

議論をすると剛直で「おれは反対だ」との語を、十数度も聞かせられた。しかし論争する時にも、いささかの卑劣さがなく、堂々として公正であった。これは竹内さんの嫌う言葉かもしれないが、私流に言えば、まことに日本武士の戦いぶり、公正な姿勢がくずれなかった。「時代を判断」して言論する、という点では、きわめて啓蒙家、教育者としての感じだったが、この公正さは、学に忠なる学者竹内好の信条だったのではないか。

この啓蒙家、教育者としての立場と、学者としての立場、そこに竹内さんのいろいろの考慮があつたと思ふ。ある座談会記事がおくつて来た。それには、大正デモクラートの吉野作造が、中国革命の研究を始めたのは、頭山満に教えられてからのことだ、との談話を書いてあつた。吉野は確かに頭山満の家に往来して、中国革命について知るところあつたのは確かだが、頭山は学者の研究などには縁がうすい。これは、頭山よりもむしろ頭山満と同郷の同志で、住家も近くに任んでいた寺尾亨のことだ。寺尾は、東京大学の国際法教授の経歴もあり、頭山とは終始相通する同志だった。それで、私はそのことを電話したら、

「私もそう思っていますよ。しかし寺尾が研究指導したと言つても、

今の連中は、ああそうかと読みますで、当時の情勢を深くほり下げて勉強しようとする気にならない。東大の先輩教授が、新進教授に影響与えただけだと思ふ。しかし吉野本人が書いた文に、明らかに、寺尾亨、頭山満と並べて書いてゐる。私は、真相は、貴方の話されるような情況だつたと思つてゐるが、學問的にも、はっきり応答し得る証拠があるのだから、ことさらに頭山満の名だけ書いて、今の不勉強者に、いささか意外だな、との心理的刺激を与えたいと思つて、ああいう話し方をした」との話だった。学者らしく寺尾の名から出して、淡々とただ自然な話し方をするのでなく、後進者の勉学心を刺激したい、との「意図的」な話法なのである。

雑誌『中国』で、載希陶の日本論が連載された。竹内さんをはじめ、同人たちの一般の感想では「この書は日本をよく知る著者の対日絶望の書だ」と言うようなことだった。私は、竹内さんに聞かれて「私は反対だ」として、この時点で著者は、日本の犬養毅や頭山満に、大きな期待をかけ、希望を秘めているのだが、それを特に「書かなかつた」ところに政治ジャーナリストの意味があると言つた。「それを書いてくれ」と言われて、投稿したら、私の論旨を心理的にも表現するのに適切なように、古い写真を見つけて来て、とくに懇切な編集をして下さつた。だがそれは私の説に同意されたものではあるまい。

ここは、反対説の存在も無視しないで、充分に検討し考へるがいいという程のことと思ふ。この「日本人論」が単行本で出る時に「君の反対論も収録したかつたが、相談がまともらなくて失敬した」との電話があつた。このあたりにはあくまでも「公正」さを尚ぶ学者としての、竹内好さんの一風格だ、と思つた。

竹内さんは、学者としては非常に公正にとめた人だった。しかしにただの公正を期して、時事に無関心に研究に没頭するには、あまりにも多情多感であつた。多くの時評を書いたし、社会的な主張もした。時評家としての竹内さんは、自らの時局判断によつて、剛直な文を書いたが、そこでは、その豊かな知識のなかの一面面が鮮やかに表現されて、黙したままに終わった側面の知識が少なくないように私には思われる。それは啓蒙、教育者としての立場から来るもので、小さな本文の例で言えば、吉野作造を語るのに頭山満の名をあげて、より詳しく知っている寺尾との間を語らなかつたとか、日中交渉史でも今の時代に「教育的」に無用、マイナスと判断したことは書かなかつた。

しかし学者としての公正の堅持を欲する故人は、自ら語るを欲しなかつた「真実」を否定するようなことは決してしなかつた。しかしこの教育者の立場が学者の立場と、無縁没交渉ではありえない。学者として知りえた貴重な知識も「今は書くまい」として残したものが少なくないように察せられる。その残された仕事は竹内さんは、生きていても「時勢の判断」が変わる情況が来ないかぎりしないだろう。

竹内さんは、そのような人だった。だから私などが全く反対の立場で討論していても、時の前提条件の判断が変われば「全く反対だよ」が「大いに同感だよ」と変わつても少しもおかしくないだけの豊かな知性のストックを感じさせた。応答に浅さを感じなかつた。

時の判断が私とちがつていつも「反対」されたが、一度だけ大いに同感された。近衛霞山公を私が「大人長者にして、その進退に節度あり」と論じた小文なのだが、霞山の康有為と梁啓超に対する態度にニ

ユーアンスの差のあるのを書いたところを見て、「よく読んでるなあ」とたった一度、大いに同感された。これは現代の時の条件に関するところが無いので一致し得るのだ、と私は思った。

時評を書いた竹内さんは、私とは反対だったが、十数回となく「反対だよ」と言われても少しも不快な嫌な感じがなかった。それは竹内さんが、豊富な知性の力があって、剛直にして公正な学者としての良心が、その根底にあったからだと思う。さわやかで、なつかしい印象のみが鮮やかに残っている。

高校のころの竹内

中野清見

去る一月十四日のことであるが、私たちは学士会館の一室で「竹内好を偲ぶ会」という小さな集まりをもった。集まったのは、大阪高校で彼と同級か同期だった連中で、一人だけ二年あとの、理科出身の山田という人が加わった。八人ぐらゐ集まる予定だったが、当日になって都合のつかない者も出て、六人になった。

竹内は昭和三年に大阪高校文科甲類に入学し、六年に卒業してい

火をおこす。洗面所に行つて薬罐に水を汲んで来る。お茶の用意をして湯の沸くのを待つ。湯が沸くとゆっくりとお茶を飲む。それが済んで、いよいよ本に向かつたと思うと、今度は机の抽出から爪切りを出して、爪を切り始める。……

もちろんこの話を聞いても、保田という男がどんな人間かを、きめつけるわけにはいかない。愚図なのか、自信をもって悠々としているのか、それとも学校で教える学科など興味ももてず、価値も認めないまま、それでもやむを得ないので嫌々ながら勉強の真似をしていたのか、他人には判らない。それだけに興味をひく話だった。おそらくは学科とか試験とかいうものを嫌つてのことだつたらう。そのためか保田の卒業のときの成績はビリから二、三番だつたと記憶する。

竹内も学校の成績はよくなかった。そのおかげで、私は高校最後の年に、一年間彼の隣席に坐つて暮らす光榮に浴した。私も成績が悪かつたからだ。当時の大阪高校では、教室の席次は成績順だつた。横に五列になつていて、一列が八人ずつだつたと思う。教壇から見て最後の左隅に坐るのが一番で、右へ五番まで読く。六番は二列目の左へ移る。その順でならんでいたのに、竹内は最前列の右端、窓際に坐つていたから、成績はビリから五番目だつたということになる。私はその隣だつたから、ビリから四番だつた。私なら、それが当然と思われようが、竹内ともあろうものが、何故そんな成績だつたのか、と思う人のために解説を加えておかねばならない。成績順は学科の平均点ばかりで定められたものではなかつた。平均点が高くて、中に一科目でも落第点の学科があると、及落会議にかけられた。この会議にかか

る。この日集まつた六人のうち、私と加藤定雄、室清の三人が同じクラスだつた。田中克己と後藤孝夫は文科乙類の出であるが、甲乙合わせて八十人の少人数だつたので、クラスは異なつていても、同じような仲間だつた。

この集まりは、もと大阪朝日にいた後藤孝夫の提唱によるもので、目的は、残された竹内夫人を慰めようというのであつた。夫人を囲んでみんなが集まり、竹内と自分たちとのことを、あらゝらゝ話合つたら、というわけである。

当日竹内夫人は、以前竹内の秘書をしていたという若い男の人を伴つて来て、この人に録音して貰うことになつた。会合は午後一時に始まり、六時まで続いた。しかし、それだけ長い時間をかけて話し合つたのに、終始もどかしいような思ひにつきまとい、終つた後にも何か物足りない思ひが残つた。そんな思ひをしたのは私だけだつたのか。それがどうしてだつたのかと後々まで考えていた。一つには、高校の寮生活の間に、彼と同室で暮らした者が、出席者の中にいなかったということもあるだろう。というのは、毎日の私生活の中で、人は世間には知られない面を出すものであり、それがその人間を知るよい緒にもなるものだからである。もつとも、その人間がとるに足らない平凡な存在であれば、そんなことは無意味だろうが、非凡な人間となれば、そんな面こそ他人の興味をひくものである。竹内とは異質な存在だが、同期の文乙に保田與重郎がいた。彼と寮の部屋で一緒だつた男の話を間接に聞いたことがある。学期試験に対する保田の勉強の仕方についてである。明日は試験だという前の晩のことであるが、彼は容易には勉強にとりかからないという。先ず、時間をかけて、火鉢に

無関係に、その後につかされる。成績は甲乙丙丁で示され、丁は落第点だつた。丁は五十九点以下だつたと思うが、同じ丁でも零点まである。及落会議にかかつた者にも序列がある。丁の数の少ない者、丁の点数の高い者から順に会議をくぐる。竹内はその中の一番だつた。私はその次だから二番というわけである。

竹内と私はそんな関係にあつて、一年間も席を隣り合せていたのだが、仲はよくなかつた。喧嘩をしたわけではない。私は彼に無視されていたのだ。私は柔道部の主将で、暴れ者と目されていた。当時の彼はスポーツには興味がなかつたようで、どの運動部にも属していなかつた。私はいろんな意味で苦しかった中学時代の反動で、高校生活の自由を楽しみ、全身で自分の青春を謳歌していた。寮では朝から寮歌を高吟し、時には喧嘩もした。そんな私を彼は嫌悪していたにちがいない。彼は黙々として、いつも何かを考えているというふうだつた。隣席から話しかけても、乗つて来なかつた。私の方は、彼を妙な男だと思つていた。いつも腹でも痛むような表情をして沈うつにかまえている。もつと若者らしく陽気にふるまえないものか、と思つていた。そんなことで、互いあまり口もきかないまま高校最後の一年を終つた。

しかしこの最後の年も終わろうとするころ、一大事件が起こつた。ストライキである。これは私たちの一年下の連中が中心になつて起こしたものだつたが、竹内も陰で参画していたらしかつた。そのとき私たちは全員寮にたて籠つた。彼が私に対する評価を変えたのは、そのときだつたということが、後でわかつた。柔道部員はストに反対し、切り崩しもやりかねないと、彼は思つていたのである。事実、柔道部

創

The Tsukuru 1978

6月号 350円

特集・火を噴くテロと共産党の誤算

* (座談会) 「青い暴力」の
向う側

野坂昭如・福田善之・畑山博

ドキュメント「石油帝国の陰謀」(ファイルⅢ) 南レバノン戦線異常あり 森詠

衝撃の二〇〇枚ノ告発集中レポート第二部

「日本の医者」(告発)「殺す側」の衝撃

総合評論社

〒104 中央区銀座1-14-13 東誠ビル
TEL (03) 562-0871 振替133422番

の幹部数人―竹内や私などと同級の―が、学校側からにらまれるというので、籠城していた寮から、深夜扉を乗り越えて逃走した事件があった。そんな中で私がストに対し積極的だったので、見直したというわけらしかった。

しかし時が遅すぎた。間もなく私たちは東京の大学へ移ったのである。彼は文学部、私は経済学部へ入った。学部が異なるせいもあって、大学では親しく交わる機会もなかった。それでも当時の東大生たちは、昼頃になると、誰が誘うでもないのに、図書館前の芝生に集まってきて、同じ高校出の連中がたまたま話し合う習慣だったので、そこでは何度か彼にも会っている。坐ったり、寝ころんだりしながら雑談していたものだ。保田與重郎も長髪の上にソフトをかぶって現われた。髪のことをいえば、竹内だって当時は濃い黒髪をもてあましていたものだ。

大学を出たあとは、みなそれぞれの職に就いて四散した。それでも仲間の消息は判っていたが、彼だけは判らなかつた。卒業後何年もたつてから、ある友人に聞いたところでは、中国文学の研究所とかに通っているというので、そんな財団法人か何かがあつて、彼がそこに就職しているのだろうかと思つてた。

彼と再会したのは戦後である。私は昭和二十二年から八年間、岩手県奥の山奥で村長をしていた。その村には名子制度という封建時代からの体制が、そのまま残つていた。名子とは欧州中世の歴史に見る農奴である。私は彼等を地主の支配から解放するために、六千ヘクタールの山林、原野を奪取し、名子その他の貧農五百数十戸に頒けた。その闘争記録を書いた本が、『新しい村づくり』の題名で出版され、よく売

その後私は、今の戸町の町長になつた。昭和四十八年の秋である。その翌年の五月だつたと思う。彼から一通の葉書が寄せられた。友人たちと一緒に、八幡平へ春スキーに行く。そのあと、ひとりで君のところへ寄る。陸中海岸を見せてくれ、というような文面だつた。

私にはこの申し出が嬉しかった。彼が見たいという陸中海岸だけでなく、青森県の下北半島まで案内し、恐山や仏ヶ浦なども見せようと思つて待っていた。それにしても彼がスキーをやるとは驚きだつた。冷水をかぶつたり、スキーをやつたり、よほど健康を重視しているのだと思つた。彼を町に迎えたとき、先ず町内の西岳という山の周辺を案内し、その夜は私のところに泊つてもらつた。私は当時、階下だけで五室もある家を借りて、独りで自炊生活をしてた。その日山の中を案内する途中で、路の側にあるタラの木の芽をとつて来たので、それを天ぷらにして食つた。私はそのことを忘れていたが、彼の死後、彼がそれが美味かつたと言つていたら、奥さんから聞いた。その翌朝、馬淵川を溯り、私がつとも村長をしていた江刈村を通り、岩泉の竜仙洞を見て、陸中海岸に出た。しかし、彼が見たいといつて陸中海岸

れたので村はひところ有名になつた。昭和二十九年のことである。そのころ竹内は、岩手県教員組合に頼まれて、講演にやつてきた。その日程を終えた後に、彼は私を訪ねて、わざわざ山奥の村まで入つてきてくれた。東北本線から四十キロも入る村で、バスの便も悪かつた。私は彼の友情を感じた。その夜は、二人だけで焼肉を肴に酒を飲み交わした。何を話したかはおぼえていない。

その後はクラス会でよく一緒になつた。大阪高校第七回卒業生の会である。彼は既に天下の著名人であり、忙しい身体だつたらうが、クラス会には、殆ど欠かさずに出てきた。絶対に顔を出さない者もいる。保田與重郎もその一人だ。そういう竹内のことを、私は変われば変わるものだと思つてた。推測するに、彼もまた、高校時代に深い郷愁をもつていたのだろう。先日、共産党の宮本顕治の著書を読んでいたら、松山高校時代を懐しげに回想している文章に出会つた。そのとき私は竹内を連想し、こうしたきびしい生き方をしている人間でも、高校時代を懐しむ気持はわれわれとあまり変わらないのだなあと思つた。

私は竹内があんなに早く死ぬとは思つていなかった。ずいぶん健康には気をつけていたように見えたからである。大高クラス会が、宇治の花屋敷であつた時のことである。風呂場で一緒になつたら、彼は水をかぶつていたのだ。私も五十二歳のときから毎朝風呂場で水をかぶつていた。これを読けることは難行なのだが、彼がそれをやつていたので、驚きもしたが安心もした。その時は、会の翌日、山宣のお母さんに会い、山宣の墓を訪ね、京都の街で別れた。別れるとき、これから鶴見後輔に会うのだといつてた。

は、濃霧の中にかくれて殆ど姿を見せなかつた。行けども行けども霧は霽れ上がらず、ついに海を見ることは諦めて久慈から八戸市に廻り、そこで彼が帰る列車の時刻までウイスキーを飲んで別れた。それが彼との今生の別れとなつた。その後も何度か通信だけは交わしたのだが、彼に書いた手紙の中で、私はそのとき彼を案内した西岳にスキー場をつくつたので、宿泊施設が整つたら招待すると約束した。それを果たさないうちに彼はいなくなつてしまつた。彼が入院していると聞いたとき、見舞にいこうか、いくまいかと、ずいぶん迷い、ついにいかなかつた。衰弱している姿を見せたくないだろうと考えたし、必ず立ち直ると信じていたからだつた。葬式の時きは、出て弔辞を読めといわれたのに議会でいけなかつた。何もかも残念で仕方がない。誰かが「彼は死ぬべきではなかつた」と言つたといふことだが、全く同感である。

思い出の中から 田中克己

竹内君がなぜわたしと関西人と知合いになったか。昭和三年の旧制高校文科の試験に、大阪高校では唯一度、数学を試験科目からはずし、代わりに歴史を入れたので、東京の府立一中から一高、三高をやめて竹内が受験し、最高率の受験者の中からみごと及第したのだとはかりわたしは思っていた。ところが竹内の死後、奥さんから聞くと、竹内は数学が好きで、出来て、お嬢さんたちにも教えていた由である。それが本当なら三高を受けず、大阪を受けた理由は不明である。ともかく竹内は文甲といって英語専門のクラス、わたしは文乙すなわちドイツ語専門のクラスだったので、竹内とはあまりつきあわず、日記を見ると、その名は昭和五年十一月、思想善導のために河合栄治郎博士が文部省から派遣されて、全校生徒が「謹聴」したあと、学校当局の非難の生徒大会が突如として開かれた時にはじまる。

わたしは善良な思想をもっていたので、善導の必要を認めず、理乙のM（のち九大助教として生体解剖に立ち会ったかどで死刑宣告を

受け在獄年後、釈放された）を誘って散歩へゆき二時間ほどして帰校すると、森閑として物音もない。不審に思って探しまわると、講堂で生徒大会とのことである。入って行って最後列に坐ると、演説しているのは竹内で、「神聖なる授業中に生徒五名を警察に引き渡した」学校当局を言葉の調子はきつくないが、極めてきびしい内容で糾弾しているのである。竹内の演説が終わると、わたしは「ストライキ」と叫びこれが全会一致で承認された。

このストライキのことだけでも何十枚になるから略するが、学校側は主謀者として竹内と保田興重郎と認めた様子である。わたしたちはこの二人の犠牲者を出すことにしのびずストライキを解いた。学校側もさぞかしホッとしたのであろう、三日後には授業を再開し三月の及落判定会議には文科は三年生全員の及第を認めた。厄介払いをしたつもりだったろう。

この年、大学に進んだ文甲、文乙の三分の一は文科にすんだが、これも珍しいことである。竹内は東大の支那文学科、わたしは東洋史学科をえらび、ともに中国を愛する意思を実現せしめた。三年たつての竹内の卒論は古典でなく、魯迅でもなかったが、現代文学で、塩谷温先生以来の古典尊重の伝統にそむくものであった。やがて北京へ留学、わたしが昭和十三年、大阪の中学教師をやめて妻子をかかえて上京すると、竹内はわたしを気の毒がっているという世話してくれた。「西太后に侍して」というわたしの翻訳が太田七郎君によって、既に出来上がっているのを知ると、共訳にしろといってくれ、それがすんでわたしに途が開けるとかれの主宰する『中国文学』の「中華民国三十年特輯号」のトップにわたしの詩をのせてくれた。ただし白金今里町の

大邸宅は引き払って目黒の貸家に移り、ここが中国文学の梁山泊となつたことは、わたしはくわしくは知らない。ただその勤め先の回教圏研究所というのへ、わたしはたびたび訪れ、『中国文学』の終刊後、回教圏についてのかれの研究をきいて、「この人にしてこの研究をするのか」と不遇に同情したが、かれはわたしはよくとその頃もう少なくなっていた喫茶店に案内し、「書く場所なくなるぜ」とのわたしの勧告に従って、戦後悪名高い『コギト』という雑誌の同人となり、同人費は納めたが、文はかかず「小学教師俛喚之」を訳するとわたしに呉れた。吃驚したのは昭和十九年二月の応召で、わたしはその留守宅をたびたび訪れ、華中において齋藤久雄君と同隊ときいた。この年、武田泰淳氏も上海にゆき、そのあと留守宅でみた写真では肥えているので安心した。十月にはわたしの贈った『李太白』を受け取ったとの便りを見て喜んだが、同じ叢書で竹内の『魯迅』が昭和十九年十二月に出来上がったのを見ると、わたしは「いつのまに書いていたのか」と感心すると同時に、書き足りず不満だったろうと思つた。意外にもわたしも昭和十九年三月十八日応召、華北派遣の二等兵となった。輸送列車には絶対安静の筈の保田ものつていた。この三十も半ばの老兵の補充に古兵たちは落胆し、その教育に困惑した。竹内も同じく肉体的精神的に虐待され、しかも現地の人とは交わりがあった様子である。

虐待の理由は、中国人に対し敵意がないとのことであつたらう。これが戦闘を主とする軍隊に適せず、わたしと同じく降服後、現地除隊を許された理由の第一であつたにちがいない。

昭和二十二年わたしが関西にいと、竹内から来た便りには、貸した本を二冊返せというので、その記憶力のよいのにわたしは安心し、

ついで昭和二十九年には十年めに竹内を浦和の仮寓に訪ね、訪ねあぐんで酒屋で、きき、扉を叩くと意外にも夫人が現われ「まにあつてます」と断わられた。保険の外交員とまちがえられたのである。あとは大笑いとなり、「何か食いたいのものは」ときかれ「草加煎餅と水小豆」というとまた大笑いされた。

昭和二十二年、わたしはしばらくの関西生活をやめ、永住のつもりで上京したが、竹内がすでに日本一の評論家になっているのに大喜びした。しかしこの大家が甚しく健啖で、大酒を飲むのに心配した。もつと心配させたのは六十の手習いで、スキーをやつては骨を折り、地下酒場に行つてはまた骨折と、理論をいうと整然としているのに対して、私生活では全く愚かというか、無神経なものには心配するより腹が立った。

第一次新安保の時、その理論が一等正しく、公立大学教授を辞めるというのに訪ねてゆき、松枝茂夫氏と同席したが、とめようもなく、このあと定収入がなくなった彼に、大酒や負傷のたび、もつと体を大切にしろと説教ばかりしなければならなくなった。とりわけ前に負傷した階段のある地下酒場へわたしを呼び出して、すぐぐくとよそで飲んでいて、いい気持で彼がやって来るまでわたしは地団太をふんでいった。そんなわけで竹内が姿を見せるとわたしは腕をとつて地上まで引っぱり上げタクシーにのせ「吉祥寺へ」と命じ、車中でも説教したあと、「七十になったら北京へ一緒にゆこう」といった。北京はわたしにも曾遊の地であり、その変化がどんなかは世界中のインテリの関心のところである。しかし竹内は何としてもウンとはいわなかった。思えばそのころから病気がもう始まっていたのではないだろうか。反対に岩手

の中野清見が来て、「おれの町ではいまスキー場を計画している。竹内すべりに来ないか」というと、竹内は「ウン、ゆる」といったのである。懲りもせずにと、わたしはこの時その強情に呆れると同時に感心もした。この強さはわたしにはなくて、一度の失敗で懲りるたち（中国では「羹に懲りて膽を吹く」という有名な諺がある）の臆病者である。小心、怯懦（けうたう）というものが竹内のわたしに対する評価であったろう。わたしはもしそれをいってくれたら甘んじて受けたらう。しかしそれは聞かなかった。かれが平気で平らげるフグをわたしは一切食べず、神経がしびれ、五千円札をほうり出して逃げると、竹内は軽蔑に充ちた顔をして、「持ってかえれ」と押しもどし飲みつづけた。

こんな追憶よりも竹内が書いた「過去の侵略戦争をおわらせないまま、もう一度戦争準備の仲間入りをしたのでは、日本民族は道義上ほろびてしまうほかない。であるから、いまわれわれが何よりも先になすべきことは、かつての全面講和論者と、大部分の善意の単独講和論者とは連合して、一部の野心家によるサンフランシスコ体制の完遂計画をさまたげ、アジアに平和を確保することである。」（新編『現代中国論』第一巻一七〇頁）との五年前の提案は、いまこそ実現すべきだとわたしは考えている。そのときこそわたしは竹内の霊前に額ずいて大喜びの声をあげ、「竹内、中国へいっしょに行こう」というつもりである。

わたしが二等兵としていた河北省の唐県にはわたしの埋めた、戦友の骨がある。これらの無駄な屍にもわたしは詫言ねばならないが、六十年間、苦しめた中国人にはさらに頭をたれて許しと親善を乞わねばならない。思えば無条件降服のあと、一等兵となつたわたしがたどたどしい中国語で中国人二人にいったことは「わたしたちの罪は認め

る。しかしわたしたちの子孫にまで恨みを残さないでくれ」とのことであった。わたしのたどたどしさを傍聴した半島の人々が、「この人のいうことを聞いてやってくれ」と助けてくれた。この半島にもわたしたちはいまだに詫言をすまみせず、日銀は千円札にその初代総督伊藤博文の肖像をにかけて何とも感じない。この無恥無神経は竹内の強さとは全く異質のものである。

わたしは何十年も漢文教育をし、「唐詩選」をよんだ時は感じなかったものを「論語」をよむ時にはよむに耐えない後悔を伴ってよむ。批孔精神は中国ではどうなつたろうか。一万円札の聖徳太子の憲法は仏教と儒教の混合した要素から成っている。紙幣のことはどうでもいい。しかし竹内の志したものは青少年についてももらいたい。このあいだ竹内の意をつぐ人たちが出した『竹内好回想文集』は三三〇部しか刷らなかつた由である。これが何十万部、何百万部刷られなければ中日友好など、政治・経済のみのことである。

君子の志は利を追求することではない。魯迅を訳し了えなかつた竹内は志の半途で斃れたのである。竹内の志をつぐ人をとくりかえしくりかえし説いてわたしは一生を終えようと思う。

竹内の認めてくれたわたしの詩才は枯れた。拙い詩を即座に作つてこの拙い文章を終える。

わたしは兵となり中国農民の蒔いた麥の芽を踏んで訓練を受けた
旬旬訓練中わたしを苦しめたのは
尖のある蒺藜の実であった

もつとわたしを苦しめたのはわたしは銃をもつていたことだった
一発もつたなかつた銃をわたしは投げ捨てて日僑の船に乗つた

わたしの良心はまだうずいている
はまびしが今もわたしの心臓を刺しているのだ。

さむらい・竹内好 判沢 弘

編集部から、まことに思いがけず、竹内さんについての思い出を書くけとの注文である。しかし、思い出といつても、氏と私との間柄は友人関係でもなく、師弟関係でもなかつた。時折り、著書を贈つて頂いていたことなどからみて、氏は私を年少の知人とでも見ておられたのではないかと思う。もつとも、氏の晩年に、氏をリーダーとする中国語の勉強会に参加させて貰っていた点を考えると、師弟関係も成立しなくもない。が、なにせ劣等生で、いつも氏を失望させ、呆れさせ、ついに、氏をして数年続いていたというこの勉強会を解散するのやむなきに到らしめたのも、その理由の一斑は、この私にあつたのではないかと、今もって自責している次第である。

ところで、この稿を書くに当って、竹内さんの全貌をもう一度確認すべく、たまたま手許にあつた松本健一氏の『竹内好論』を一読して

みて思ったことは、この国の論壇における氏の存在の意味がいかに大きいものであり、やや唐突に過ぎた氏の逝去は、わが思想界にとつて、恢復すべからざる損失であつた、という実感であつた。ついでに言えば、松本氏のこの書はたしかに力作である。教わるどころ多大である。だが難を言えば、この本は、松本健一氏が竹内好に捧呈したラヴ・レター（愛の手紙）の気味がなくもない。この点が気になつた。以下に松本氏の竹内評を念頭に置きながら、私の竹内観の一端を述べて見ることにしよう。

私が初めて竹内さんに逢つたのは、敗戦から四、五年を経た頃、私の郷里米子に於てであつた。当時は所謂啓蒙時代で、市当局が魯迅祭を主催し、内山完造氏、増田渉氏、竹内好氏などをつぎつぎと招聘したが、竹内氏のときは、市の依頼により私が接待役を仰せつかつた。友人と二人で市中の旅館におもむき、しばらく竹内さんと雑談していたら、氏は突然スラム街を見たいと言ひ出した。心得顔の友人は、旅館から程遠くない寺町と呼ぶ地域に御案内します、と席を立つた。私達は道々、丁玲の『太陽は桑乾河を照らす』という作品を話題にしたように思う。友人の案内した寺町は、寺々の樹々の蔭に当たるせいか、日当りの悪い、ドブ泥の臭う地域ではあるが、とりたててスラム街という程の街区ではない。竹内さんも怪訝そうな顔で、一巡して、私たちは宿に帰つた。だが、私が不審に思つたのは、竹内さんのスラム街への関心は、氏の思想の中でどんな位置を占めているかという疑問である。以来二十数年経つが、今もって私は掴めないでいる。

もう一つ私が奇異に思つた例をあげよう。さきに、私は氏の晩年、氏の中国語教室のメンバーであつたことを言つた。生徒は市井三郎・

橋川文三・鶴見和子、それに石田雄氏と私が大分おかれて参加したが、(他に女性一名、但しお名前を失念)私はこのほかの劣等生であった。ことに、私が毎回のように遅刻するのが、かなり竹内さんの御機嫌を損じていたらしい。数回説教を喰った記憶がある。ことに無断欠席をしたあと出ていった日の竹内さんの顔面には、まともに顔を上げていられない思いであった。NHKから依頼されて広島放送局へ行ったときも、なぜか氏に無断で出かけてしまった。広島では、地元のS大学の先生と二人で対談するものと思つて着いてみると、予定変更で、作家のK氏も交えて三名の鼎談となつて来た。が、それはともかく、帰京して、おそろおそろの中国語の会に出席し、無断欠席を詫び、ことのついでに、多分竹内さんとも知り合いであろうと思ひ、広島で同席した、作家で中国文学者であるK氏の名を口にしたら、意外にも、「ふむ、彼は中国で捕虜になつた男でね……」という言葉が返つてきた。実は、私もそのことは知つていた。いつ頃か、随分前だが、その間の事情を発表したK氏の小説を、雑誌に載つた当時私も読んだことがある。山脈から谷へ、また山脈へと逃走する数名の兵士たちの足跡を、中国の地図と対照しながら読んだ記憶がある。だが、竹内さんの右の言葉は、私にはまったく思ひがけない言葉であり、爾来、私の心の底に激のように滞留する言葉となつた。そして、今やこの言葉は、私にとって、竹内さんの思想の秘密を解きほぐすキ・ワードともなりつつあるように思えるのである。

竹内さんが応召したのは昭和十八年十二月、朝鮮半島を経て、中支に派遣され、奥漢線沿線で一兵士(三十三歳)として宣撫班・宣伝班の仕事に任じていたという。私も同時期に学徒兵として召集され、中国、

満州・魏東北の歩兵部隊に投入された。竹内さんは氏の戦場体験について余り多くを語っていない。が、私は氏の左のような文章に接したとき、「はあ、なるほど」と思った。

「終戦後、間もなく、私は管内の医務室へいった。いつものように患者がむらがつていた。若い、幹候あがりの軍医が、突然どなたにおまえたちのような弱い兵隊がいるから、戦争に負けるんだ。その声は、どなたというより、うめき声に近かつた。『敗戦』というコトバをそのとき、軍隊ではじめて、私は聞いた。軍医は、ひとりどどなっているが、兵隊は黙々としている。軍医の孤独の心が私にしみていった。兵隊たちにもしみていったにちがいないが、兵隊は無表情であつた。」

「大東亜共栄圏」の理念や「敗戦」などの受け止め方について、私と竹内さんとはかなりの相違があるが、それはさておき、かりに私はこの軍医の言葉を耳にした場合、竹内さん同様、軍医の心が私にしみていったらどうか? 否である。まず、「お前たち」と呼びかける屈丈、高な軍医の姿勢に反感を感じた筈である。氏は「兵隊たちにも(軍医の孤独の心は)しみていったにちがいない」と言うが、私は、舌打ちをして聞いていた兵士も少数はいただろうと想う。この竹内さんの文章を読んだあと、私は空想の中で、竹内さんに刀を吊り長靴をはかせ、軍医や中隊長やに仕立ててみた。現実には氏は一兵士だったが、何かの具合で、軍医が中隊長に任せられたら、氏はその任務を遂行されたらうか、どうだろうか、という空想である。私はしばらく迷つたが、結論は、案外、氏はその任務を積極的に遂行されたのではないか、というものであつた。中国への侵略戦争を敵しく断罪しながら

も、大東亜戦争の理念に一度は自己を賭けた竹内氏、そして、戦後には、大東亜戦争の二重性——つまり、アジアに対しては植民地侵略戦争であつたが、米英に対しては、相互に帝国主義戦争であつたと主張する竹内氏の立論からして、私の右のような想像は必ずしも可笑しくはないのではあるまいか。

たしかに、世界的視野からみるなら、大東亜戦争は二重的性格を持つていた。対米英戦は相互に帝国主義戦争であつた。だが、少なくとも視野を戦闘そのものに限るなら、近代軍隊と前近代軍隊との(ことにその組織論において)戦闘であつたといえる。私は、竹内さんはこの点についての認識が弱かつたのではないかと思う。それは何故なのだろうかと思ひめぐらしてみ、最近やつと気が付いたことは、竹内さんの中に、一種の「さむらい的心性」が存在していたことによるのではないかと、いうことである。氏の日常が肩ひじ張つた姿勢だつたというのではない。氏の心性が、町人的、農民的であるよりは、はるかにさむらい的だつたことを言いたいのである。かりに、竹内さんが帯刀して鬚を付ければ、大藩の城代家老くらいの貫録は充分にあつた筈だ。氏が、興味をそそる人物として高橋泥舟、西郷隆盛、北一輝などをあげているのも、なるほどとうなずける。(私ならささしずめ良寛和尚などをあげたいのだが……)

このように見てくると、氏が敗戦直後の戦地で、一軍医の嘆きに共感出来、また、前記のK氏について、ことさら「捕虜」の事実を取り上げるといったことも、氏のさむらい的メンタリティから発しているもののように私には思われる。だが一般に「捕虜」という状況に追い込まれるような、状況にある人間にしか見えてこない問題状況という

ものがあり、また同様に、下積みの世界に息をひそめて生きている人間にしか見えてこない問題状況があるが、さむらい的心性の竹内さんにはこのあたりが見えていなかったのではないかと私は思う。氏の昭和三十五年頃の文章の中に「(人民は)それ自身が天皇制によって滲透されており、おだてたりあまやかしたりする対象物ではない。鞭うすべきものである云々」という言葉があるが、これなど、氏のさむらい的心性を見事に表現し得ているものと思う。

ところが、松本健一氏は、丸山真男と竹内好とを比較して「丸山真男のファシズムにはじぶんがふくまれていないが、竹内好のいう日本イデオロギーには自分がふくまれていない」と述べているが、私もこの意見に賛成である。が、しかし、竹内さんのいう「日本イデオロギー」には、たとえば、捕虜や下積み人間の視点から逆照射することによってみえてくる日本軍隊ないし日本社会の問題状況——といった次元のものは含まれていないように思われる。これを換言すれば、日本の知識人とか大衆といったものおしなべての、日本民族全体の資質についての懐疑・絶望といったものが竹内さんにはやや薄弱だつたのではないかという疑問が私には残る。なぜなら、氏が敗戦前後の中国にあって、日本本土で革命運動が展開されるのではないかと期待したり、また、安保闘争当時の抵抗ぶりに接して、「日本人であることの誇り」を感じたりする竹内さんの心性は、私には理解できないのである。

しかし、振り返ってみれば、米子での初対面以来二十数年間、氏の著書・論文・対談を通じて私は量り知れない多くのことを竹内さんから教わつてきた。だが、年齢の開きもあつてか腹藏なく話し合つたと

いう記憶は一度もない。唯、新橋駅近くの徳間書店地下のレストランで、かなり酩酊している竹内さんから「お前は、いくらから見所のある男のように思う。今後ともしつかりやれ！」と手を握って激励されたことが一度ある。大層うれしかったが、願わくは素面の時にほめて貰えたらとも思ったことであった。本稿で述べたことも、でき得れば生前の竹内さんと対面しつつ、あの大眼玉にひるむことなく陳述してみたい。幽界の竹内さん！、見当はずれなことを言ったかも知れません。もしそうなら、笑い飛ばして下さい。

断片的に——竹内好との交渉 福地幸造

わたしたちの教育現場での小さいサークルに竹内好がどんな風にかかわってくれていたのかを、西田秀秋は、竹内好の新盆にあたっていたとき、開かれた第四回兵庫解放教育研究会で次のような手紙を、竹内夫人宛にだしたことを報告している。

「——おもしろおこせば、その狭い部屋に、兵庫解放研に集う若い教師達のはみ出す程寄っていました。その車座の真中に、上野英信さん、

る姿をみて、容易ならぬ状態と察知いたしました。先生は『講演は、何年か前からの約束だからやる』とおっしゃって下さって、その御言葉がたよりでした」（以下略）

秋ごろだったろう竹内好は京都で岩波書店主催の講演会にきていた。わたしはこの全同教二十八回大会の現地実行委員長という役目を指名され、身動きがとれず、添書を竹内好宛に託した。あのとき、一分でもよい、会っておけばと、くやまれてならない。

武田泰淳が、死去したとき、わたしはとっさに、「竹内好がまたぬ」と思い込んでしまっていた。

魯迅の再反訳にのみ、全力を集中していることは、手紙のなかからでも察知されていた。過労でたおれるのではないかと不安をいつも持っていた。そのことだけではない。わたしは武田、竹内との交渉について、そう思いこむような交渉の呼応を両者の文章から、読みとっていたというにすぎぬのだが、竹内は武田の後を追うように逝った。

わたしにとって、戦後、わたしを形成してくれた（過去形でいうのではない）ものが、部落問題であった。また、そうありつづけるだろうと思う。その中で、わたしにとって、恐い人がいた。つまり「文章かき」の中で、わたし自身の内面的な基準の質の高さ低さといったものを、みすかされてしまうようなものとして読む「文章かき」が三人いた。

中野重治と竹内好と石原吉郎であった。石原の文章や詩に出会うのは、もっとあとだったから、敗戦直後からということになると、中野重治と竹内好だった。

小沢有作さんらに囲まれて、私があだ名をつけました海坊主先生と、竹内好先生がオールドとか焼酎を傾け、パイプをくゆらせて本当によく話されていました。

すでに御仏になられた海坊主先生に、今年の集いに、大会前夜のうたげ、これは本当に質素なものでした、にやはりおいで願って、その周りで、哄笑の絶え間ない一時を持つことが出来ませんことを寂しいと思っております。それでも、恐らく厳しい政治情勢の中で、私どもはまた、第四回大会を、林竹二先生（竹内先生と同じに、この国の中で、やはりかけがえのない心内の深い人にめぐり会えました）を囲んで催しますことについて、海坊主先生は愉快がってくれていると思います。

竹内好先生と兵庫解放研の私も青年教師との間のつながり、絆といったものが世間に語られることもないと思われませんが、一端はこのような出会いがありました。

やさしい、素直、厳しいそういったところで、私どもは竹内好を知っていました。

この夏の大会をまぢかにして、やはり海坊主先生のいろいろなまなざしを背に私どもはきばってやっていこうと思っております——」

「一回目から三回目まで、いつも来ていただいていた竹内好先生が、去年の全同教大会のあと亡くなられました。その前夜祭に、記念講演を御願ひし、承知していただいております。

先生から、『それに備えて、身体を鍛えておこう』と御返事をいただいていた、倒れたという一報を奥様から頂き、急遽上京いたし、御会いしました。二階から、奥様に肩をたすけられて、おりて来られ

わたしが竹内好に直接会ったのは、竹内が当時、物議をかもした「日本共産党に与う」を『展望』に公表した直後ぐらいだったろう。ある教育出版社が毎夏、比叡山で、主催する学習会に竹内が講師で出席し、その話のあと、竹内を囲んでの小さいハナシあいがあったときだ。出席の教師たちは、所謂自称進歩派の連中だったから、論はこの竹内の一文に集中した。

竹内は、かなり失望の色をかくさなかった。「皆様がそうおっしゃいます」と、沈黙側に廻ってしまったように思う。わたしは何をしゃべったかはもう記憶にないが、一言だけのやりとりを覚えていて。何のきっかけで、わたしが発言したのかは、その場の雰囲気では、見当がつかぬのだが、「わたしはナニヲ節派だ」と言った。竹内は、わたしの方をむいて、「お前はナニヲ節を喰るのか」と質問した。眼は笑っていた。わたしは、「そこまで、まだ修業が足りていぬ」と答えた。

全国部落解放集會に竹内も参加していた。夜の集まりがあった。自然、竹内を囲むような集まりになっていたらう。わたしは発言する現場教師の発想に、かなり激怒していた。

この会のあと、谷口修太郎が「竹内好が、フクチは根っからの教師だと言っていた」と伝えてくれた。

わたしは、かなり愕然（？）とした。「根っから」というのが分からなかった。わたしは現場教師ではある。それに違いない。しかし、「その反対だぞ」というのが、わたし自身の基準だった。何回か会う機会がありながら、この「根っからの」という竹内のわたしへの判定は聞かずじまだった。

思想史に学ぶ

思想の科学
連続特集

—74-4月号—

わが思想史の旅
ロマンチズムの合理主義者 兼常清佐
偉大なる高等遊民 狩野亨吉
革命的近代思想の旗の下に 羽仁五郎
藤田農場争議のころ 重井しげ子さんに聞く 牧瀬菊枝

—74-5月号—

続・わがへらめきークロポドゲの人々― 阿伊染徳美
コラーージュ的 宮武外骨論 河原涼
ニヒリズムそしてテロリズム 秋山清
日常と同時に統一的に完結する抵抗者三好十郎 折原脩三
怪奇絵のなかの青春 竹中英太郎推論 藤川治水
反アカデミズムの彗星 一戸直蔵 中山茂
思想史の再創造―生活館ノート― 野本三吉

「魯迅の会」が神戸でもあると聞いた。わたしは、いきなかつたが、未知の魯迅の「愛読者」なる読者層が想定できず、とうとういかなかつた。西田秀秋が参加した。西田の伝聞で書いていく。この最初の集まりは、西田のなぐりこみになり、会そのものの発足は流れた。そのあと、世話人たちと竹内、西田も一緒に酒をのんだらしい。その席の酒代を支払おうとしたYを竹内は一喝したという。「お前より収入が俺の方が多いいのだ。余計なマネはするな」と。そして、その会で、沈黙が支配したことについて、竹内は西田に詫びていたという。

西田が竹内好を海坊主先生と呼びだしたのは、このときからだったろうと、わたしは思っている。西田が竹内好に出会って、肉感的に親近感をもつたことは確かだったろう。

もう一つ西田に関係していることがある。西田の結婚記念に、わたしは、岩波版の『魯迅選集』を贈ることにしていた。わたしはケチツて、別冊、『魯迅案内』一冊は、はずすと、宣言し、西田から、「一揃いでないと、意味がない」と抗議され、もつともなことから、『案内』も揃えてわたした。その後の再版で、この『案内』は省かれていた。わたしも聞かなかつた。今にして思えば、聞いておけばよかつたなと、つくづくと思う。

第二回解放研究会のとき、新神戸駅へ、わたし一人が出迎えにいった。書信で、ギックリ腰で、治療もかねて、神戸から、金沢へ湯治に廻るという日程での参加だった。

現場教師のわたしが、自身の実践や雑文を、本にマトメて出してしまっている。それが恥ずかしいという思いが消えぬのだが、そのことが献本ということを殆どしないことになってしまう。何を竹内に贈呈したかは覚えていないが、一冊は贈っているはずである。

竹内好は、解放研へ「学習にきたのだから」と、終始、黙って聞いていた。西田の追悼の中でも触れている通り、青年教師たちとの暖かい交流をつくってくれていた。解放研への注文も一言もださなかつた。わたしも「ユカリもないのか」と逆襲され、書かされる破目になった。「解放教育」の臨時特集号の冒頭は、竹内好の追悼となっている。それをみられた林竹二夫人は、手さげから、「論語」を一冊とりだした。竹内好から、林竹二宛署名、恵存とあった。瑞栄夫人は、「因縁ですわね」と、その「論語」を大事そうに、なでておられた。(文中敬称略)

おそかりし「老」 との出会い

久米 茂

竹内好は、まぎれもなく、生活者だったろう。解放研は、その辺がムキダシだから、竹内好の感覚領域内にあつたのだらうと思う。

わたしは友人に上木敏郎という人がいる。成蹊学園の高校教師だ。その博覧かつ正確ぶりは驚異をこえて脅威すらおぼえる。しかもその知識や資料を他におしげもなく提示し、ときに施して惜しまない。(これもわたしには驚異で脅威)竹内老―この人を生前からこう呼んできた―のことで具体例を記そう。

学恩については、返せそうにもない。

一九六九年八月号の『中国』で老は「漢文をどうするか」という文を書き、その学習法に訓詁法と直詁法があつて、後者の主張者に倉石

この小雑文は、林竹二の強い推薦があつたので執筆依頼をすると、編集部から、依頼があり、仰天し、林竹二に抗議した。「わたしは、『思想の科学』とエンもユカリもない」なら、お前は、竹内好とエ

を、後者の主張者に倉石

武四郎と岡田正三の両氏がある……ということを書いた。さてその岡田氏について老は「いまは故人のプラトン学者岡田正三さん……」とやったのである。

上木氏はびっくりした。岡田氏が鬼籍の人となっているからである。というのは上木氏は岡田氏の学殖を敬してつきあいをつづけ、この年にも年賀状をもらい、老の文を読む数日前にも店頭で氏訳出の『プラトン全集』をみかけてその健在ぶりを承知していたつもりだったからである。そこで老にさっそく上木氏は手紙を書いた。『岡田氏が亡くなられたとは信じられない……記憶がいではありませんか』と。

さあこんどは老がびっくり仰天した。老は氏にペンを執った。上木氏自身がしるした文によるとその手紙はつぎのような内容である。

「お手紙を頂いてギョッとしました。私は記憶のわるいタチなのでいつも書くとき用心しているのですが、それでも時々失敗をやらかします。以前にも尾上柴舟さんがある小さな百科辞典で故人（いまはほんとは故人になられました）としてしまってお詫びをしたことがありません。今回もそれと同例で何とも申しわけないことです。次号に訂正しました。発行次第お送りします。同時に岡田さんにお送りしてお詫びするつもりでおります。……お電話したらお留守なので、一筆認めました。ありがとうございます。」

こんどは上木氏が恐縮した。そして老の人柄に打たれた。氏はつぎのように書いている。

「このお便りには、かえって私の方が恐縮してしまつたが、竹内氏の率直な人柄に打たれ、氏にたいして大変好意をおぼえた云々。」

なるほど老は率直な人間だったとわたしも思う。なかなかこうはで

着目した少数者の一人である。『日本支那現代思想研究』という著書がそれであつて、これははじめ英文で書かれ、イギリスで出版された。日本と中国を同列にあつちう着眼がおもしろいし、それを英文で発表したものもおもしろい。

この先駆者の名が埋もれてしまうのは残念だとかねて思っていたところ、はからずも特志の研究者がいることがわかつた。世の中は広い。しかも、その上木敏郎さんが、大庭柯公の伝記を書いた久米茂さんの親友であることもわかつた。してみると、世の中はせまいというべきかもしれない。

『土田杏村とその時代』は、私の拝見したかぎりでは、行きとどいた編集ぶりである。一見、好事家の趣味雑誌のようであるが、その底に現代ジャーナリズムに対する批判精神が秘められている。魯迅友の会にとつても参考になるだろう。上木敏郎さんの住所は……」

これにはわたしがオドロキ入りかつ感服つまつた。わたしのことを書いてあるからであるが、その応用動作（？）がなんとうまいか！いやいやそんなことではない。この世の裏街道でコッコツと研究し、なんらのみかえりも報いもアテにせずがんばっている人間、つまり上木氏への過不足ない紹介と暖かい配慮にである。

たしかに上木氏の杏村にたいする打ち込みは尋常ではない。その全作品に目を通したことはもとより、杏村の郷里に足をほこび関係者、係累者をたずねあるき、さらにその裏付けをしたのである。しかも身ゼニを切つて幾冊もの研究誌を著し、研究会も何度かひらいた。まことに志篤き人である。

そういう上木氏を老はしつかり見たことにわたしはここがおのの

きないものだ。というのは、わたしも幾人かの人に、その記述にあきらかなまちがい（思いちがいを含め）があることを指摘したことがあるがそのことごとくがナシのつぶてだった。ある男のごときは「資料にこうあった」と居直る始末。そんなチョロイ資料をうかつに信用した己の愚かさをタナに上げて……。老の態度は一人前である。――あえて立派とは言うまい。

さてこれには、後日譚がある。上木氏はその後間もない時期に京都の岡田邸を訪問している。そして氏がプラトン研究のために神戸大学を辞したことも確認した。（そのとき老からの詫び状がとどいていくことも知つてあらためて老の誠実に上木氏は感服したという。）

（注記）以上のことは成蹊学園教職員組合機関誌『桃源ニューズ』七〇年四月号に上木氏が書いたものと、氏自身の談話である。

ではこの問題（？）に老自身はどんなふうにか書いているか。魯迅友の会会報四七号（一九六九年九月）に「世の中は……」というタイトルで、宮本研作の『阿Q外伝』や米人・アルバーの魯迅研究の紹介記を書いたあと、

「ここには別のことを書こう。上木敏郎さんのことだ。」

じつは上木さんの存在を私は知らなかった。雑誌『中国』の連載記事で私は失敗をやり、その失敗を教えたのが上木さんで、それが縁になつて私はこの世にも奇特な人物を知つたのである。上木さんは土田杏村の研究を志して、埋もれている史料の発掘につとめ、その手段として『土田杏村とその時代』というタイプ印刷の不定期刊の個人雑誌を出している。最近、第十一号が出た。

土田杏村は大正の末期、五四啓蒙時代の中国思想に同時代人として

くほどだった。旧制高↓東京帝大というエリートコースを歩いた人には珍しい。ほんとうに珍しい。

話がとぶが、老の葬儀のとき、わたしは中途から退席して駅へ急ぎ足で向かつた。（もう一つ弔いがあつたからである。）すると駅の坂道で上木さんとバッタリ。上木さんの顔は汗ばんでいた。おそらく授業をやりくりしても追いつかずおくれ、そのことを気にして駅の階段も駆け足で上がつてきたのだろう。その一徹さ、実直さが表情によく出ていた。ああ老はこんな人に愛され、好かれ、慕われていたのだ、と思いをあらたにして電車に乗つた。（上木さんとはそのときほんの一言、「二言ことばを交わしたがそれはたしか二人で老のことを語り合おうよ」と約した。こつちの怠慢でそれっきりになっている。老よ、上木さんよ許してください。）

二、老と葦津氏と鶴見氏と

話はこれより十数年前にさかのぼる。いまもときどき店頭で『共同研究 明治維新』という本を見かける（T書店発行でたしか五版を重ねた）が、この中に老は明治維新が中国に及ぼした影響について書いている。みじかいが、老独自の史眼と凝縮力とで江湖の士から愛読されている。

老はむろんこの研究会のメンバーであつた。しかしわたしの思い出す限り、出席率はそう高いほうではなかつた。チーフの市井三郎氏がよくできた人だったから会は終始一貫スムーズに運んだ。（先輩をよく立て、若い人にも何かと心をくばつて、ほとんどイヤな思いをせずですんだ。これはわが人生に大した出来事だ、と今もひそかに感謝している。）それなのに、いやそれゆえか、たまに出でた老はひょうひょ

うとして終始黙然、そしておひらきとなると、また風のように去るの
であった。

——このご仁、ご尊名ほどの人物じゃないワイ。つきあいにくいね
え、これだからインテリは困る——などと、老をわたしはうさんくさ
げにみていたものである。

ところが、である。このひょうひょう居士がある日ある時、まっ先
に出席し、目をかがやかして一同がくるのを待っていたことがある。
これはまた異なること、珍なことよ。どんな風の吹きまわしか知ら
ん、とわたしは目をまるくしたものだ。

しかし、ほどなくこの異にして珍なる光景の理由が分かった。

報告者は鶴見俊輔^{つし}大人。テーマは「明治天皇について」。出席者もふ
だんより多く、かつ定刻に始まった。はじめっから会の空気がピン
とした。

老は大人の右隣に坐り、そのままかいに葦津彦^{ひこ}氏が坐っていた。

その隣（右側だったか？）に、仙台からおみえの林竹二^{たけふ}氏。

わたしはこの風景をみてハタと膝を打ったものだ。むろんこれはだ
れの作爲でもない、偶然にできたものがわたしはそうか、そうか、
なるほど、とうれしさとある種の緊張とでワクワクした。

読者よもうお分かりだろう。なぜわたしはワクワクしたかを——。
なに？ 分からない。ではひと言だけ記す。

大人は明治天皇を豊富なデータをふまえてこてんぱんにやるかもし
れない。しかし、それをこんどは葦津氏が、氏一流の論理と情念とで
反論するだろう。すると大人もこれを、適撃^{ていげき}してフンジンの論戦を
張る、葦津氏がこれに再反撃……これは世紀のみものゾ、とわたしは

る。

そういうえば、氏は老の葬儀に正装で参列していた。氏もまた、老の
知己のひとりであったのだ。

三、老と新聞を発売したかった

いつだったか、代々木の中国の会に誌代を払いに行ったときだった
と思うが、きげんのよきそうな老の顔（パイプをくるくるつと廻すと
きがそうであった）をみたわたしは「竹内老よ、雑誌じゃなく新聞を
出しませんか。週刊でも月刊でもいいじゃないですか？ 体とそこば
くの腕を提供しますよ」と言った。すると老の目が一瞬光った。さて
は乗る気か、と身をのり出した。しかし、老の口は目とはウラハラに
冷めていた。「いやあもうおそいです、残念ながら。日本人は活字を
本気にはせん習性があるんでね。大学をやめたときはそう思った。ひ
ともも言ったことがある。しかし、賛成するものがなかった。あのと
き、あんたがそう言ってくれば……」と。

老の評論集や「中国を知るために」などを読むと、たしかに老は新
聞を出すことをかながえていたな、と思えるフシがある。

残念なことをした。老との出会いのタイミングがわるかった。しか
しそろそろこちららも、長途の旅に出る日が近づいたのでユメはずて
はおらぬ。老よ、いつの日か——。

ワクワクしたのである。いやまだある、老がころあいを見て、大人の
援護^{すけご}に立つのではないか？ 加えて林教授が第二戦線の論戦を……と
いうふうにわたしは思えばいたものだ。

しかし鶴見大人は、まさにこれ古代中国の大人（ここではタイジン
と読んでほしい）の貌そのままに?! 淡々と説き来り、説き去ったの
である。葦津氏はひとつとつうなずき、ときおりメモをとってい
た。老も林教授もシートと聞き入るだけ。

報告は二時間近くかかったと思う。彼にしては珍しく長丁場だっ
た。おわると、フーッと大きな息を吐いた。そしてお茶をゴクリゴク
リと飲んだ。（わたしはあんなにうまそうに茶を飲んだ人間を、これ
以前にもあとにも見たことがない。葦津氏から感想と質問が出たが、
それは殆ど共感の意のもったものであった。ほかに、一人か二人何
か言ったがおぼえておらぬ。ただ市井氏がホッとしたような顔つきだ
ったことも印象に残っている。

会がおわって二、三人の人とお茶をのんだ。そのなかで某氏（とく
に名を秘す）が「いやきょうは研究会はじまって以来の大論争かと思
っていたが……」とのたもうた。すると、もうひとりの方（これも名
を秘す）が「鶴見氏は葦津さんを充分意識してしゃべっていたね。し
かしそれが内容をいつそうよくしたと思う。竹内さんの無言の応援も
よかったのかなァ」と言った。

わたしはやっぱりそうだったのか、とひとりニヤニヤした。
しかし今にして思う。葦津氏は率直かつ淡泊に鶴見大人の報告を学
ぶべく出席したのだと。なお長きになるが、わたしは葦津氏にたいし
てその知力と学力と徳力にこのとき以来畏敬の念を抱きつづけてい

編集者 竹内好 — 遠くからの追悼

宮内嘉久

二昔以上も前の話になる。「竹内好って、こわいひとだねえ」と、
呟くようにほくに言ったのは丹下健三^{けんぞう}だった。箱根仙石原での討論会
に赴く車中、たまたま話が「国民文学論」に及んださいのことである。
一九五四年夏、国立近代美術館による「グロピウスとバウハウス展」
開催を機に、招かれたワルター・グロピウスとイゼ夫人とが日本を初
めて訪れた。その折、国際文化会館の計らいで、グロピウス夫妻を囲
む泊まりがけの討論会（箱根会談）が行なわれることになり、建築家、
批評家、編集者たち併せて二十名ほどが集まったのである。討論の主
題は「伝統と現代建築」であった。

戦後、「血ぬられた民族主義」を避けて通ってきた面では、日本の
建築家の意識もまた、他の分野のそれと変わりはしなかった。近代主
義もマルクス主義もその点は同断、という竹内好の指摘のとおりであ
った。しかし、すでに朝鮮戦争前後から、たとえば谷口吉郎による馬
籠の藤村記念堂に見るように、当時「新日本調」と呼ばれた傾向が表

にははじめており、伝統に対する建築家の姿勢の取り方も、微妙に変化しつつあった。一方、モスクワ大学の様式主義的作風に象徴される「社会主義リアリズム」の建築表現とその美学とが、それを否定するにせよ肯定するにせよ、建築家にとっての問題関心であったことも事実である。また、だからこそ、この箱根会談の前年秋に、針生一郎によつて翻訳・紹介された、ハンガリーの党理論家、ヨーシュフ・レーヴァイの一文「建築の伝統と近代主義」『美術批評』一九五三年十月号が波紋を拡げていったのである。

いまふりかえってみれば、ややのちに（一九五六―七七年ころ）、建築ジャーナリズム史上「伝説論」および「民衆論」と呼びならざれている、設計方法と建築家の立場とを問い直す一連の論議は、その一つの端緒を、この箱根会談に求めることができるかもしれない。こうして、一九五五年の前後数年間は、「戦後建築」における一転換期となつた、とみることができよう。そして、その流れの深いところに、竹内好の光芒は、鋭く、しかし屈折した形で届いていたのである。……

戦中の『魯迅』をばくは知らない。ばくが竹内好を知つたのは、コミンフォルムによる日本共産党批判を契機として『展望』に発表された文章（日本共産党に与う同誌一九五〇年四月号、のち『新編・日本イデオロギイ』筑摩書房一九六九年に収録）からである。さらに「近代主義と民族の問題」『文学』一九五一年九月号、のち『前掲書所収』が、読けての平手打ちに等しかった。それは「日本的なるもの」すべてに反感を抱いて生きてきた戦中経験への、冷水を浴びせられるような痛撃であつた。いらい二十年間、竹内好はばくのなかで大事な存在を意味してきた。とりわけ、六〇年安保闘争にさいしての、あの身の処し方に、ばくは

るほど、彼の匿名性はますます堅固になり、匿名性が堅固になることによつて彼はますます活殺自在の力を身につける」と、竹内好はその対談集『状況的』（合同出版一九七〇年）の序に書いている。自身、執筆者と編集者との「二足のワラジ」と、そこに誌しているように、竹内好における編集者は、ついに終始一貫したのではなかったか、とばくには映る。最初の中国研究会から最後の『魯迅文集』（筑摩書房、第一巻一九七六年——）に至るまで、それは文学者・思想家としての仕事であつたと同時に、もしかしたらそれ以上に、編集者＝竹内好の仕事であつたのではなからうか、というふうには、言葉の最も深い意味で、編集者とは本質的に組織者の謂いにはかならない、とはくは思うからである。

その観点から見ると、そして先の「けじめ」と併せ考へるとき、編集者としての竹内好は、稀に見る達人という印象が強い。とくに編集責任の取り方（編集者の身の処し方）という点で、それは——対自的・対他的に——鮮やかである。中国文学研究会のことはいま措くとして、たとえば『思想の科学』事件（一九六一年十二月、天皇制特集号の中央公論社による廃棄処分および翌六月一月、公安関係者・右翼への同社の残本提出露見）に対する態度、また「中国の会」の発想（その独自の「とりきめ」と、とりわけ、そこで育ててきた雑誌『中国』を、いわゆる日中国交回復の政治的過程のなかで、あえて廃刊（一九七二年十二月号をもって）させた見識、など周知の例を挙げるまでもなく、そのことは明らかであろう。

一九六六年に「現在での自己評価という」と、竹内好はその「自画像」のなかで書いている。「私という人間の才能の特色は、ある種

ひそかに脱帽した。とはいへ、ばくは遠い場所にいる一編集者であり、しかもあまり熱心とはいえない一読者であるにすぎなかった。

一九七〇年秋、個人誌『廢墟から』の第一号をつくつたとき、ばくは自分が勝手にその読者として想定した百人のひとびとのなかに、当然のようにして竹内好の名を含め、その小冊子を送りはじめた。翌七一年に入つて、第四号のあと、はじめて竹内好さんがはがきを下さつた。続いて三月にも、第五号に書いた都知事選に対するばくの批判の観点に、全面的に共感するところをお便りをいただいた。うれしかった。こうして竹内好さんとの距離は、ばくのなかで縮まった。しかし、お目にかかりたいとは考えなかつた。それが図らずも実現したのは、一九七四年夏、『少数派建築論』（井上書院一九七四年）というばくの最初の本の出版記念会に、竹内好さんが来て下さつたからであつた。しかもその席で、通して全部読みました、と竹内好さんは言つて下さつた。ありがたいことである。……

出処進退という。竹内好さんのことを想うときに、ばくはいつも真っ先に、そのけじめの付け方が脳裡に浮かぶ。竹内好の言葉の重さも、そこに由来するであろう。まさに「こわいひと」である。言説の次元ではなく、生きることにそのことに照らして、かけがえのないひとを喪つた想いが、今日いよいよ深い。この想いは、ばくにとつて終生変わらないだろう。また、おそらく多くのひとびとにとつて、これは共有の環であるにちがいない。

そういう大前提のうえで、ばくは、編集者としての竹内好について、ここですこし考へてみたい。

「編集者は元来、匿名の存在である。編集者が編集者らしくなればなれの組織能力にあるかのごとくである」と。「それも三軍の総帥という柄ではないので、せいぜい独立守備隊の隊長格である。帷幕には参ぜず、さりとて単騎潜行もしない。ある程度の自由裁量の幅があり、戦闘の合間には魚釣りもできる。私はこの境地に至極満足である。」とも『竹内好著作ノート』序、のち『転形期』創樹社一九七四年に収録。別の文脈と重ねれば、「至極満足」は半ば真実、半ば苦しいアイロニーの趣きがあるとしても、この肖像画は、「プライドだけは独立独歩、掌中に天下をまるめる気概」を、その職業倫理の柱に据える、竹内好の編集者像（前掲『状況的』序と、よく照応する）。

それにつけても惜しまれるのは、竹内好主筆の「小新聞」が、ついに陽の目を見なかつたことである。この小新聞の発想を促したのは、六〇年安保闘争の経験と、「七社共同宣言」に見る「マスコミ」の姿貌とにあつた、と推測される（『小新聞の可能性』『思想の科学』一九六二年七月号。なお日高六郎の証言（一九七〇年七月、前掲『状況的』所収）参照。しかし同時にこれは、六〇年代末期から七〇年代前半にかけて盛んとなつた、いわゆる「ミニコミ」の先駆的創見であつた。

今日、竹内好が小新聞の可能性を考えていた段階よりも、管理社会的状況はもつと悪化している。そのなかで、たとえ別の異なつた形でもこの創意を継承し展開させることは、さまざまの分野にあつて竹内好の出処進退に学ぶものの、むしろ切実な共通課題とすべきところではなからうか。

けれども、それは険しい道である。重い意味をもつだけに難事である。かつて竹内好の「こわさ」を口にした人間が、いまや軽がると飛んで、アラブ反動派の都市計画に肩入れするような具合にはゆかない。

しかも、その仕事の礎石には、少なくとも次の一行だけは、かならず
読みこんでおかなければならないのであるから。「否定の方向からで
も真理に到達できると思ひ込まなければ、私にはとても学問研究はや
れないし、究極の目標として沈黙を設定するの、でなければ、言論活動
などできたものではない」(竹内好「自画像」、前掲。傍点は引用者)。

「お目にかかる」 ということ

白鳥邦夫

この小文は、つぎにあげる私の欠点を総合して応分の修正ないし削
引きをして読んでいただきたいと思っております。

①記憶力が劣る。②率直さ。③真摯な素直さに欠けるので親しく正し
く先人の教えをうけとることがむずかしい。④虚栄心から人偉大な人
の前を遁走する習性がある。⑤言葉にならないことを表現しようと
していること。これには語彙の貧困さも手伝って用語が曖昧になるこ
とをふくむ。⑥その他のこと。

しかし、竹内好氏について、私に個々の具体的な想い出がない、思
い出を「書けない」ことが、単純に私の欠陥のためだけにやるのら
語、の教科書にとうとう竹内さんのお文は出てこなかったなあ。」と想
つてみて、このことのおそらく大変な意味を考えてみたくなりました。
た。

ここでまた名前をあげるのは失礼と思うけれども、茜雲の下の雪深
い道をたどるわがままな想念のなかに、三年間の教科書の人々が去来
するのでした。丸山真男・大岡昇平・大江健三郎。加藤周一とベンダ
サンが並んでいて、金子光晴と宮沢賢治の詩があつて、遠藤周作から
北杜夫……そう、二次次に中国文学者としては高橋和巴氏のが、ただ
し現代青年論といったものだが、あつたな。しかし竹内さんはなかつ
た。なぜだ。なぜなんだ。そういえば、高校に勤めて永い歳月になる
が、ここ十年ほどにかぎっても。うん、昔、魯迅の短編を竹内好訳で
読んだかな。ともあれ、ご自身の文章は全く拝見していない。生徒諸賢
とともに学んでいない。ほかの会社のテキスト(たとえば筑摩書房版
なら)あるのだろうか——とたどるうちに、ことの深刻な意味(があ
るにちがいない)をいま初めて感じてある戦慄をおぼえるのでした。

現在の管理装置下の学校教育に用いられるような教科書に文章がの
ることを自分から拒んでこられたということでしょうか。事実は知り
ませんが、一定の中間項をおいて推論するならば、納得できるような気
がします。もしご自身の意向でなくて載らないのだとしたら、理由は
なんであれ、大変なことだと思ふのです。でも、どのように大変なの
かは私ごとが言うまでもないでしょう。竹内好著作集のどこをひも
といても明白なことだからです。——いま私に言えることは、①この
小文の(書けない)ことが半月もの間気になっていたことが、この「
大変な」発見の原因らしいこと。②教科書にないのなら、ない人の文

うかと考えてみるのです。

「竹内好の思い出」という題で小文をつづるよう編集部から仰せ越し
があつたとき、すぐに「書けないな」という感じと「しかし書きたい」
という想い、にうたれたのでした。ついで、まったくなにも浮かんでこ
ないので「やはり書けないか」と想つてからも、おたよりに「鶴見さ
んが是非——」にと勧めてくださったとあるのを読みかえしては「な
んとか書きたい」と感じていました。この「すぐに」と「ついで」の
間にどれほどの心の屈折があるのか、自分でも説明できません。でも
上の想念を逆にたどってみるとき、ここでお名前をあげるのは失礼で
すが、私は永年にわたつて鶴見先生からある意味で直接にお導きをい
ただいていて、そこで、甘えがあつて、あるいは先生「の背後に」な
いし「を通して」竹内さんの「お目にかかつて」いることとは
ちがうのだけれど、いや、それはかなり確かな事実であるけれども、
もつと不可解な、なにか特別な感情なのです。総じて私が、怒意のこと
ばに表現してはいけないことなのだ、という想いです。これが「書け
ない」のに「書きたい」根拠なのです。

二月二十五日、土曜日。午後から三年B組の諸賢が数人残つて卒業
記念文集をつくるというので手伝つたあと、これも三月一日の卒業式
を目処に、三年生の女生徒と四人で作つている同人誌のガリ切りを済
ませてから「日が長くなった。春が近いのかな。」とつぶやきながら、
久方ぶりに陽ざしをあびて帰るとき、晴れやかな気分なのなかに、ふい
に「そう、今年もなかつたな。この三年間を使用したM社の、現代国
章だからこそ、私がとりあげて——「教材の自主編成」を組合からも
生徒からも言われている——生徒とともに学習するべきであつたの
に、それに気づかなくて自分呆れたり恥じたりしたことでは
た。

私が竹内さんから直接には二度ほどお目をかけていただいています。
す。それなのににも思ひだせないので。その日付もお話くださつ
た内容もです。

一度はわざわざ能代市(秋田県)まで、私どものサークル(山脈の
会)に仕事をあたえてくださるという形で講演にきてくださいいまし
た。講演のあとは、聴衆の有志もまじえて竹内さんたち講師をかれん
で、公民館の一室で干魚に茶碗酒という酒宴をひらきました。この粗
末な宴会は人を、ことに八人のなかの人々を迎えるには失礼なもので
あつて、いまでも赤面するのですが、それは当時サークル運動をつづ
けていた私どもに、私には生意気が、若い仲間たちは人率直さVがあ
つたためでした。でも、こんななかに竹内さんは「平気で」参加して
くださいました。この日の私は講演会の主な係の一員であり、宴席の
お煙番でもあつたのに、お話の内容を全く記憶していません。なぜで
しょうか。裏方に専念し、酒つきにまわっていたからだと弁解したら
傲慢でしょう。

ともあれ、宴席である人たちが交替でじっくりと、あるいはせきこ
んでお話しかけるのに対して、竹内さんがパイプを手にして、ゆっく
りとならずにおいでになる横顔を拝見するという仕方が私のすべ
てでした。お声に特徴があつて(といま思つてみるのですが)ややか

ン高くてあたりはやわらかで、という一見形容矛盾に聞こえるでしょうが、いくらか頭の方から出てくるという印象をうけています。大きい。なにが。風格が、人物が、などといつてはいけません。この大きさはどこからくるのか。二度ほどお酒をつぎにうかがったが、私には△大きい▽という想いしか記憶にないのです。——実は、いまの私にはそれだけで充分なのですが。

このあとでした。これまた日付がおぼつかないのだが、秋田市で講演会があって、中国物産展の会場であったから、日中友好協会支部がお招きしたのでしょう。当時まだ秋田県では、というより高校の職員室の現場などでは、中国を「中共」と呼んでいて、私どもの中国に対するひそかな熱い想いを「アカ」呼ばわりして辱しめ封じこめようとする雰囲気があったところです。風の噂に講演会のことをきいていたところへ、とらわれない元氣な若者たちに誘われて、車でかけつけたのでした。

講演は、明治から現在にいたる日中関係の歴史を一つ一つ具体的な事象に即して丹念にお話してくださいました。おききしているとそれが実は大きな事実の芽や根であることがわかるのでした。丹念で、そして「堂々と」していて、いや、この語は竹内さんに叱られるでしょう。お腹に力のこもった鋭いやさしき、とでもいう意味の△骨太な▽お話でした。お声の張りにうたれました。会場の座席の関係で講師を私はやや斜め後方から眺めることになったのですが、このときの竹内さんは実際にも比喩的にも文字どおり△背すじの通った▽お姿で、私は一瞬△崇高な▽想いでした。——冒頭の「私の欠点④」に関連し

日常の「お目にかかる」のではなくて△お目にかけていくさる▽ことの実感なのです。「空気」の比喩がいけないなら、一種の△公▽といいかえます。過去の妙な「公儀」とは正反対の意味での△公儀▽です。

こうして、私の竹内さんの想い出は、やはり書きたいのに書けないで終わったようです。でも、いまでも心穏やかなのはなぜでしょうか。みなさんにお礼を申しあげます。

竹内好回想

巖 浩

「魯迅友の会」に言われて、竹内好氏を回想する短文を先日書いた。それは、とるに足らぬ一人の青年が、内的外的いろいろの因縁から、竹内好という人に次第に近づき、遂に「実物」に会うに至るいきさつを述べたもので、「竹内氏回想」というよりは、私自身の経過を大きくっぱに跡づけたものにすぎなかった。

その文中、一部訂正というか、より正確に直すべきことで、『日本読書新聞』に入って間もなくの私が、藤間正大氏著書の書評を竹内氏

で、この「崇高」から宗教性を抜いて用いたいし、このときの竹内さんから△志士▽の語を想ったことをつけ加えておきます。

さて、このときもあとで短い時間「粗酒粗肴」の懇親会があって私も末席に連なるのですが、一度だけ起って能代の集いのお礼を申しあげると、「山脈を大事につづけてくださいよ。」と言われました。「はい！」とだけ答えると深々とお辞儀をして帰りましたが、実に私が竹内さんのお言葉で想い出せるのはこの一言だけなのです。

小学校から中学にかけて、敬慕している先生から廊下などで「ききくに」声をかけていただいて「はい！」と答えたときのあの感動です。身のひきしまるあの想いです。

竹内好先生は、私には△空気▽なのです。私もし詩人だったならある表現ができるでしょうが、いまは私には、どのような文字にも表わせない、表わしてはいけない人なのです。

お顔つきははっきり見えるのです。「身近に」親しく見ていくさるのかわかるのです。おそろくとも沢山の人たちがおわかりになると同じようにです。これはいわゆる日常性の「面識がある」とか「交際が深い」ということと関係ありません。そも、数×万人の大衆のなかの平凡な一人にすぎない私ごときが直接に△お目にかかる▽ことなどできなくて当然のことです。それにこの△親しく▽はある権威に対する実際の、あるいは心理的な距離といったものではないのです。それではきつと竹内さんの鋭く批判される「天皇制」になってしまいます。私たちの生活体験のありようによって竹内好氏が私たちをつつむ「空気」になっているということなのです。「お見受けする」とか

に頼みに行った件がある。

それがいま言った「実物」を見た最初であり、その時期を、私はウロおぼえて「昭和二十四年中か二十五年の初めのうちに」と書いたのだが、あとで実際に調べてみると、その書評は二十五年五月十日号に載っていた。従って、書評依頼に私が行ったのは二十五年三月か四月、と推定される。またその本は『歴史の学びかた』という書名であることも分かった。

これが、竹内氏が『日本読書新聞』に書いた最初の文章である。立間氏編『竹内好著作ノート』（昭40）にはこの一項が抜けているので、記しておく。さらに私は、（その書評の見出しは、たしか「砂を噛む思い」だった。）と附記したのだが、これは記憶違いで、この言葉は文中に出てくるだけだった。ただ、私には強く印象づけられて今日まで続いていた、ということである。（竹内氏はそこで同書の「文体見本」を数行示して批判を進めている。）

右の小さな事実が分かったので、次に依頼した「曲学阿世」というエッセイが一週あとの同五月十七日号掲載であることを考えると、それまでとつおいつ思えがいていただけの竹内好という人物に、一気に阿成に接近したことが知れる。先の一文に書いたことだが、その時の思いは「あそこがれ」従って「はじらい」、というようなものではなく、「恐怖」であったのに、そのあと私はこの「おそろしい」ヒトの浦和のすみかに入りびたることになった。

以上は「友の会」の短文の補足であり、私が自分で納得すればいいことばかりである。

しかし、故人の回想となると困る。「竹内好のいる風景」はおほろげに浮かぶが、その時の言葉や動作をいちいち正確に覚えているわけではない。私が接していた時期も、昭和二十年代、三十年代が主で、終わりの十二、三年ほどは、私がバカいそがしい貧乏商売を始めたこともあって、たまに会うくらいだったから、まして日記をつける習慣もないので、大方は茫茫として煙霧のごとしだ。

大体、竹内さんという人は、書いたものの骨力や念力や出処進退の仕方の強烈さと対照的に、日頃は茫として掴みどころがなかった。私が「恐怖」のあとで「入りびたり」になったのも、このことと関係があるだろうと思う。年齢を言うなら、三十九以降の竹内さんであり、私の方は十五歳年下ののだが、当時は年のことなど、とんと頭に浮かんだこともなかった。私は穏やかに明るい空のような「恩寵」の中で酒を飲んでいたのである。しかも不思議に、竹内さんの前ではほとんど絶対に、ウソが言えないのだった。

以下、記憶の断片を記してみる。

有楽町の「山の家」で、月一回だったか、竹内、武田泰淳、岡崎俊夫、飯塚朗、千田九一氏たちが集まっていた。私は「来てもいいよ」と言われて、時々出ていた。ただ傍聴するだけだったが、或る日、競争中に特務関係にいた「党员」中国文学者が皆の前に両手をつけて罪を詫びるところに行きあった。岡崎氏が詰問し、その人物は、罪は万死に値する、僕をドブ溝の中でも何でも突っこんで踏んつけてもらってもいい、というような辞を述べていた。一同の顔に不快そうな、苦笑ともつかぬものがかすめて、竹内氏が武田氏が「もう、いいよ」と

二十七年から二十八年にかけての頃、私は竹内さんに中国語を習いはじめた。浦和の二階家に、朝出勤前に寄ったり、夜帰りに寄ったりした。竹内さんは初歩の教科書と注音符号の辞書を私に与え、ポ、ポ、モ、フォの発音からまことに熱心に教えてくれた。二階に上がるにすぐ始めた。大声をあげるものだから、小さい裕子ちゃんが面白がって邪魔をしに來たり、お父さんの大頭によじのぼったりした。中国語のお礼に、バターやハムやチーズなどの包みを差し出したことがある。竹内さんは少し体をこわしているらしかったし、金はないはずだ、と私は勝手にきめていた。「こんなことをする必要はないよ、あんたもバカだなア」と竹内さんは笑わずに言ったが、それでも受け取ってはくれた。そしてすぐ奥さんに言って、乾椎茸をお返しにくれた。

都立大学の教授に（昭28・6 四十三歳）就任以後、中国語の勉強場所は大学の中文の部屋になった。松井博光氏と二人で通った。ところが松井氏は当時、慶応の社会学四年生、私はもともと全くの外人人間で、ヘンなものだったかもしれないが、別に気にしたことはなかった。その部屋は、そんな空気であった。テキストは巴金の『長生塔』という伝承風な材料を扱った短篇集であった。松井氏はのちに中国文学の専門家になり、私の中国語は結局モノにならないまま途中で終わったのだが、これは恐らく、竹内さんを先生とする中国語勉強会のハシリではあったらう。

竹内さんは都立大からの帰りに、助手や学生たちと一緒にしばしば酒を飲んだ。渋谷の恋文横丁にあったギョーザ屋「珉珉」などにもよ

投げすてるように言い、その人は帰って行った。私は緊張していた。「山の家」ではほとんど焼酎だった。誰かがビールを飲んでいたらどうか。その頃、昭和二十五年の夏に、陶晶孫氏（郭沫若夫人の義弟）が台湾から脱出してきた。竹内氏にその話を聞き、朝日の岡崎氏の介添もあって、「山の家」に現われた陶氏から「一年間」という短いエッセイをもらった。「……魯迅とあうと若い人から悪口を言われやしないかと思った。郁はよくしゃべり、魯迅は煙草ばかりふかし、私は黙ってきいていた。」といった内容である。

新宿の小さな飲み屋で一緒にやっていた、私は「蘇州夜曲」だったか「シナの夜」だったかを、デレデレ歌っていた。「へえ、そんな歌、やはりノスタルジーがあるのかねえ」と竹内さんはウフウフラ笑っていた。

「山の家」でもそうだったが、竹内さんははじめの頃はよく焼酎を飲んでた。竹内好は焼酎と私は思っていた。浦和の家の或る夜、ウイスキーのビンを引きよせていたので、「はー、ウイスキーに昇格したんですか」と言うと、「あっしだって、ウイスキーくらい飲むさ」とついであつた。竹内さんの「私」という発音は、「わたし」と「あつし」との中間くらいに聞こえるのだった。

陶器類をいじるような趣味は、竹内さんにはなかったと思う。一度だけ、炬燵で「これはいい、姿がいい」と言いながら、鶴の形をした白地に青の康德利を手を持って、喜んでいたことがある。博多かどこかで買ってきたのだったか。誰かの土産だったか。

く行った。或るとき、若い評論家のH氏が、竹内氏に対してしきりに質問を發した。竹内氏は注意ぶかく聞いてはいるようだが、全く応答しない。H氏はなおも質問を続行するのだが、ニコリともせず答えなのまま、ほかの者に「さあ、もつと酒を飲みなさい、さあ、さあ」などとやっている。H氏もついには黙ってしまった。事情は知らないが、あれも見事なものだとは思いつつ、今もつてよく分からない。

或る朝、玄関に入ったら、どうもいつもと様子が違う。奥さんの「ああ、イワオさん」と言う声の調子にも顔つきにも、どうも取つきにくいものがあった。私は勉強のときは、上がりがまちからすぐの階段で二階へ上がることが多かったが、それであれば下の部屋に入る。その時もそうだった。竹内氏は炬燵の中にいた。それがまた、ちよつと妙なアンバイなのだ。何か仏頂面のようにでもあり、テレているようにも見える。「どうかしましたか、何かあったんですか」と、私が尋ねたかどうかは忘れた。「何か……」ぐらいいは言ったかもしれない。

「へへへ、いま台風が吹いてたんだよ」と竹内さんが言った。隣の台所から、「まあ聞いてよ」と奥さんが入ってきた。——ゆうべ客（飯塚朝氏）巴金の訳者、だったか）が来て、夜つびで飲んで、朝、帰って行った。くたびれちゃって、炬燵に入って横になっていたら、竹内がひどくののしかった。と、そういう話を奥さんがフンガイに堪えぬ面持ちで語った。竹内氏は訂正もせず、フフフと薄笑い、私はただ「へえ！へえ！」と言うだけだったが、それから急速に通常の空気になつたので、安心した。

奥さんで思ひ出す。滑稽で恥ずかしい。やはり或る朝寄ったとき、私の腹具合が、与野の下宿でメシを食ったあと丁度そういう時間帯に入っていたので、台所の向こうにある便所を借りて、むろん大きい用をすませて、出てきて、台所の水道で手を洗った。手洗水の場所を見落したせいであるが、もともと私にはそういう「便宜主義」的なところがある。「アララッ！ 手はこっちで洗うのよ」と奥さんの声が飛んできた。たしかその時お二人は、チャブ台に向かって食事の最中だったと記憶する。竹内さんが「無表情な目」で私を見たので、よい恥じ入ってしまった。

浦和時代の竹内家では、私は酔って寝こんだことも二、三度はあった。夏、二階で眠ってしまったとき、奥さんと二人で蚊屋を吊ってくれた。立ち働くその姿を、私は寝たまま、モーローとした酔眼の隅で見ている。

昭和三十三年の六月下旬から、私は『日本読書新聞』の「現場代表」のような恰好になった。その前年からモメゴトがあり、それまでの人数が一挙に三分の一に減った状態から出発して、少数のスタッフと力を合わせて、どうにか山を乗り越えた一年後の三十四年五月、竹内好氏はこの新聞と執筆関係を絶った。「文部省図書推薦制度」に対する態度が曖昧であった、という理由である。いま、この件を詳しく説明する必要はないしその場でもないが、私はこのとき初めて、竹内氏に腹を立てた。何が「曖昧」か、と。私は竹内氏に文句を言った。

光晴氏も一席ぶった。竹内氏は「新聞を出す会のすすめ」の題で話した。竹内さんはその前から何度か、「小新聞の会」というのを開いており、私も含めて数名の人がときどき集まった。「小新聞」は実らなかつたが、竹内さんは小雑誌『中国』を昭和三十八年二月に作った。その第七号が翌年六月に「新出発準備号」と銘打って出て、以後「中国の会」の自主刊行となったが、私はこの号に橋川文三氏の誘いで「人づての中国」という短文を書いた。その号が手もとにならないが、私の「中国」は尾崎秀実・魯迅・北一輝・宮崎滔天・竹内好といった人々によってもたらされた、という趣旨のものである。

この七号以降の毎号に、「会と雑誌のとりきめ（暫定案）」六カ条が掲げられており、なかでも「一、民主主義に反対はしない」と「五、良識、公正、不偏不党を信用しない」が大いに気に入ったので、いつだったか竹内さんにそう言ったら、この「とりきめ」についてはいろいろ議論があつてまだ決着がつかない、「みんなマシメだからねえ」と、ぼつんと言葉を切った。善人への好意と慨嘆が相半ばしているように感じられた。

三十八年の十二月初めに、私は谷川健一氏の斡旋で大西洋から西アフリカ方面に出かけた。それに先立ち、新聞の協力者に対する謝意の表明も兼ねて、ささやかな見送りパーティを開いた。竹内、橋川、神島二郎、安田武、宗左近、金達寿氏ら四十人くらいの人が集まってくれた。その席で、いや、アフリカ行ってヒコキで飛んで行くんじやありませんぞ、四百何十トンのマグロ漁船の臨時船員になって、ペルリが来た久里浜を出航して、印度洋から大西洋で操業やって、三、

何月何日号の報道記事、何月何日号の反対特集を見てくれたのか、云々と。

竹内氏は意志を変えなかった。悲しかったが、仕方がなかった。情ない一年がたった。その昭和三十五年（一九六〇年）五月に、竹内氏は都立大学を去った。その「ごあいさつ」という謄写刷りが、私の自宅に配達された。（私は与野の下宿から、二回の引越しを経て、数年盲目黒に移っていた。）朝、家を出るとき、郵便箱に入っているのに気がついた。私の声に女房が「どうしたの」と言った。「竹内さんが辞めた」と答え、歩きながら何度も読んだ。「かつかつ生計を支えるくらの才覚はありません。」というところが、妙に迫った。私は一種の昂揚を覚えながら、『日本読書新聞』のコラムに感想を書いた。

竹内氏はそれから一カ月ほど後の七月に、安保闘争における共産党の現状について、「読者の問いに答える」という文章を書くことで、『日本読書新聞』との断絶状態を終わらせた。この文章は『不服従の遺産』に収録されており、その「あとがき」中に、「……私としては、その意志表示の目的が達せられた以上、和解したかったし、こちらの主観ではこの機会に和解できたことを喜んでいる。」とある。この本が出た三十六年の夏、竹内さんは「そうだ、これはあなたにも上げよう」と言いながら、八月三十日の日付とともに署名してくれた。因縁の本ということだったか。私はうれしかったが、しかしまだ釈然とはしなかった。

翌三十七年の十月、『日本読書新聞』二十五周年の講演会を催し、竹内、杉浦明平、小田実の三氏に来ていただいた。「飛び入り」で井上四カ月のあとガーナに上陸という順序ですよ、と話したら、竹内さんは大いに興がって、「なんだ、そうだったの、そんならいいよ、あつしゃまた、アフリカに行くつもりだ、大したことないじゃないかと思つてたんだ、そりゃいい」とはじめて「関心」を示し、会の終わりに「では元気で行ってらっしゃい」と、お客代表で見送りの言葉を述べてくれた。あの笑顔と声はよかった。有難かった。女房など涙ぐんでいた。あのとき竹内さんは五十三歳である。今、私がその同じ年に達した。

竹内好氏に対する私の心残りに、「軍隊」がある。もうすこし軍隊の頃について、こまかく話を聞いておくのだった。竹内さんがそういう自分の経験を、それとして話してくれたかどうかは分からないが、そう思うのは、こういうことがあったからだ。

竹内さんは昭和二十六年の『思想』四月号に、「軍隊教育の問題性」を書いた。

「民衆は……大学が自分たちの生活の利益を守るものとは考えない。ところが軍隊は、かれらの生活に直接触れている。」「徴兵検査は……多くの民衆にとって煩いでもあるが、また喜びでもある。」「軍隊生活に嫌悪を感じるのにはインテリの偏見で、民衆は嫌悪と同時に憧憬の念を抱く。」「この伝統は、私が軍隊生活を体験した戦争末期にもあきらかに残っていた。私はそこから、自分がインテリであるために生じた固定観念について多くのことを学んだ。」

竹内さんは昭和十八年の暮れに陸軍に召集され、中国大陸へ渡っている。三十三歳である。私は十九年暮れ、満二十歳のちよつと前に、

くに九州の連隊に入営した。移動はあったが国内で終わった。

敗戦のとき、竹内さんは一等兵で、私もそうだった。私は「戦争末期」の軍隊でいろいろの同僚と同じメシを食った。百姓、電気工夫、学生、やくざ、馬車引きなどだった。私は年も若かったし、「インテリ」といえるものではなかった(タマゴではあったか)。従って軍隊に対する「固定観念」「偏見」というものを、そう言えるほど強固に持ち合わせていなかったが、こういう同僚たちとの毎日の中で、初めていろいろと——インテリ人種の他愛なき、ダメさ加減を含めて——見えてくるが多かった。

或る日、近ごろお書きのものでは「軍隊教育」がいちばんいいと思つた、と話す、これは珍しく、「フフ……そう思いますか。そうね、あれは短いけど力を入れた。」という応答だった。「軍隊は大事なテーマなんだが、いまだき軍隊をじっくりやる人間はいないねえ」とも言つた。あそこには、軍隊の精神史は国民の精神史、という観点が中心に坐っていた。

こういうこともあった。私が大西洋・アフリカ・トルコを経て帰国した昭和三十九年の晩春、留守中の新聞に載つた匿名コラムに「右翼」が囁みついた。私は既にアフリカ行の半年以上前から編集の立場は下りていたのだが、事が事だけに、前面に出た。トラックで押しかけてきた「右翼」との応待に始まって、私とその団体の本部に「乗り込」んで「紙上論争」をもちかけたり、いろいろやつた(当時の経過は逐一紙上に記録されてある)のだが、ある段階で、私が編集部内の多数意見に批判されて、苦境に立った。私の考えが実行できなくなりそう

「やさしさ」への約束を 果たせなかつた

野添憲治

一人の作家なり思想家、あるいは一冊の本との出会いが、その人の生き方や人生観などに、大きな影響をあたえることが多い。わたしは少年時代から青年時代にかけてもつとも影響をうけたのは、作家では堀辰雄、本では竹内好さんの『魯迅』(采来社刊)であった。どう考えようもなく結びつきそうにない一人の作家と一冊の本だが、そのあたりの事情はわたしにもうまく説明ができそうにないが、わたしの少年時代から青春時代にかけての生活と深くかかわっているように思える。

一九三五年に秋田県の山奥の貧農の長男に生まれたわたしは、生活におわれて小・中学校を通じて半分くらいより通学することができず、中卒と同時に山林・土方関係の出稼ぎに歩いた。人里から遠く離れた飯場生活を七年ばかりつづけたあと、こんどは地元の国有林の作業員になり、ここでも飯場生活を八年ばかりやつた。

出稼ぎ生活をした時に、わたしはいつも堀辰雄の本を持って歩い

になったのだ。さすがに参つて、私はかなり深刻になっていた。夜おそく、吉祥寺に竹内さんを訪問して、初めて相談した。

無表情に聞いていた竹内さんが言った。「足もとを固めなかつたのは、まずかつたねえ。」私は「ハア」と言つただけで、黙っているしかなかった。しばらくして、つと立つと竹内さんは書棚をあちこち見ながら、「どっかに歩兵操典があつたんだがなア」と言つた。「え？歩兵操典ですか、何を調べるんですか。」私はテッキリ他の事だと思つたが、唐突なので、おかしくなってニヤニヤした。竹内さんはまだ立つたまま、「ほら、独断専行、つてのがあつたなア」とまことにサラリと言つた。そうか、俺の事なのか。かくかくしかじかの状況で、分隊長は小隊長の、小隊長は中隊長の、中隊長は大隊長を仰ぐイトマもなく、みずから独断専行することがある。それを遅疑逡巡して、隊を死地に陥れ、戦局を失うことなけれど。

私は妙に気が楽になって辞去した。

さらに。——昭和四十年、竹内さんは『著作ノート』中の「自画像」で「ある種の組織能力」を自己評価している。その言い方がこうだ。「それも、せいぜい独立守備隊の隊長格である。」戦闘の間には魚釣りもできる。」

「軍隊」は、竹内好氏の深い底に、相当大きな比重で沈んでいた、と私は推量する。

た。そして一日の重労働を終えて飯場に帰り、大人たちは酒を飲んだり喧嘩したりして騒ぐ中で、薄暗いランプの灯を頼りに、ひと晩に一頁とか二頁といった具合に読んだ。ひと冬のうちに何回も読むと、こんどはノートにその作品を書き写していったが、素漠とした山奥の飯場生活の中で、堀辰雄にふれている時だけ、わたしの胸の中は暖かかつた。

出稼ぎ生活に終止符を打つて地元の国有林の作業員になり、また飯場生活をつづけた。このころになると、なんとかしてドロ沼の底から這い出して、自分の生き方をしたいと考えるようになっていたが、ちようどその時に手にしたのが竹内好さんの『魯迅』であった。義務教育もろくに受けず、しかも魯迅の作品を一度も読んだことのないわたしにとつて、竹内好さんの『魯迅』は難しかった。正直言つて、理解のできない部分が多かつた。それにもかかわらず、一頁、二頁とランプの下で読みつづけられたのは、書かれていない部分の重さ、激しさに、わたしが引きつけられたからだろうといまは思っている。

それは竹内好さんが、いつ兵隊にとられるか判らないという戦争の中で、「追い立てられるような気持で、明日の生命が保しがたい環境で、これだけは書き残しておきたいと思うことを、精いっぱい書いた本である。遺書、というほど大げさなものではないが、それに近い気持であつた」と執筆した時の心情を書いているが、現実はこの著を書き上げた直後に召集令状が来たのだった。「私は『魯迅』を書くことによつて私なりの生の自覚を得た」というこの切実な竹内好さんの情念が、難解そのものであるこの著を読みつづけたのであろう。

それから数年後に、わたしは待望のドロ沼から抜け出したのだが、

魯迅を読み出したのはその時からであった。入手したのは『魯迅選集』（岩波書店刊）であったが、ちょうどそのころにわたしの住んでいる『能代市で講演会を開いた時に竹内好さんに来ていただいた。翌日、男鹿半島を見たいというので、早朝からタクシーを頼み、日本海岸ぞいに南下して男鹿半島をまわり、秋田駅に出たのだった。その時に、講演の謝礼の何倍にもあたるタクシー代を、「わたしが頼んだのだから……」と無造作に置いて、ホームに入っている汽車の中に消えていった後姿を、わたしは最後まで鮮明に覚えている。

その後わたしは、一九四五年に秋田県の花岡鉦山で、強制連行されて来た多数の中国人が殺害された「花岡事件」を調べるようになった。そのことを竹内好さんほどで聞かれたのかわからないが、何度か便りをいただいた。内容はいつも簡単に、「花岡事件を調べているそうだが、大切な仕事だから頑張ってください。資料など必要なものがあったら、知らせてくださいねえ」という意味の文面だった。確か二年おきくらいの割で、三回ほどいただいたと記憶しているが、わたしはそのたびに、遅滞として進まない仕事に入れられると同時に、わたしのような者にまで何度も便りを書き、激励してくださるやさしさに、胸が痛むような思いになった。

一九七五年は、花岡事件が発生してからちょうど三十周年にあたり、わたしは十年近くわたって調べてきた花岡事件を、この三十周年を契機によりやく一冊にまとめ、「花岡事件の人たち―中国人強制連行の記録」（評論社）として出版した。この本はいま手にしても、まだまだ調べが足りず、わたしの内部でも充分に発酵していない部分が多く、満足のできる内容のものではなかった。

わたしはこの講演会で、もう一人の方にぜひ出席して、話をしてもらえないだろうかと考えていた。竹内好さんであった。不充分ながらも花岡事件を一冊にまとめることができたのは、竹内好さんの暖かい思いやりがあったと同時に、竹内好さん自身もこの事件に深い関心を持っていてのを知っていたからだった。

だが、一九六五年から評論家廃業の宣言をしているのを知っていたし、近年は『魯迅文集』を一人で訳す仕事に専念していることも聞いていたので、依頼するのは無理だと思った。しかしそうは考えても諦めがつかず、安田武さんを通じて竹内好さんにお願ひしてもらったところ、講演はできないが、挨拶だったら引き受けてもよいという、非常に好意的な返事をもたらした。

講演会の日竹内好さんは挨拶してくださっただけではなく、その夜、浅草・飯田屋で開いた拙著の出版祝賀会にも出席してくれた。会費はいらぬというのを無理に出してくださり、遅くまで若い人たちと語っていた。

その翌日、わたしは出版社と相談して、講演会で挨拶してくれただけのわずかばかりの謝礼を、お礼の手紙と一緒に竹内好さん宛に送った。その後、東京にしばらく滞在してから能代の家に帰り、留守中に届いた手紙類を整理していると、その中に竹内好さんからの現金書留が速達で来ているのが眼についた。わたしはなんだろうと思ひながら、急いで封を切った。その中にはわたしが東京で竹内好さんに送っ

だが、それはそれとしてこの時に考えたのは、この本の印税を自分の「物」にしてはいけないということだった。もちろん十年近くかかって調べてきたのだから、多くの時間も費用もかけているが、しかし、花岡鉦山で日本人の手によって殺害されたり、あるいは不具者になって帰国した中国人たちのことを思うと、そのことを書いた本の印税を、その穴埋めにしようという気持にはとてもなれなかった。誰かがしなければならぬことを、わたしが手掛けたにすぎないのだから――。

わたしは東京にいる友人たちに相談し、この本の印税で講演会を開いてもらうことになった。花岡事件が起きてから三十年も過ぎて、花岡事件そのものさえもかなり形骸化してきているだけに、この機会に一人でも多くの人にこの事件の全貌を知ってもらおうと同時に、できることならこのマイナスの遺産を多くの人たちに共有してもらいたいと考えてのことだった。

講演会は七月五日に東京都勤労福祉会館で開くことになり、当日はわたしのほかに、花岡事件の生存者の一人で、いまも札幌市に住んでいる劉智渠さんをお願いすることになった。わたしも何度か劉さんに会っているが、花岡鉦山時代の食うや食わずの苛酷な生活がたたくて、五十歳を過ぎてからは病気がちの劉さんだった。それに、暑さに弱いことも知っていたから、引き受けてもらえらるかどうか心配だったので、わたしが札幌の自宅までお願いにあがると、「あなたがわざわざ来てくださったのだから」と、病弱なうえに仕事も忙しいのに出席して下さることになった。礼には礼をもって尽すという言葉のようになり、永年日本で暮らしているながら、劉さんは中国人そのものであつ

た謝礼がそのままそっくりと、手紙が入っていた。そこには、「わたしはこういうつもりで行ったのではない。このままお返しするので、今後の勉強に役立ててください」という意味のことが、簡単に書かれてあった。わたしはその中に、竹内好さんの律儀さと、心のやさしさとを知らされた。

その後で上京した時に、安田武さんに会って事の顛末を伝えて相談したところ、「竹内さんはそういう方だから、送り返すのはかえって失礼にあたるだろう。いつか機会をつくり、お礼の意味と一緒に一杯やったらどうだろう」と言われ、わたしは竹内好さんの好意を素直に受け入れることにした。そして、すぐそのことを便りで伝えると、さっそく速達で返事をくれて、その好意だったらいつでも受けたいから上京することがあったら連絡して欲しいと書かれてあった。

だが、その後もたびたび上京したが、竹内好さんや安田武さんの都合が悪かったり、わたしが時間をとれなかったりで延び延びになっているうちに、病気で入院したという話を聞き、わたしは暗澹とした気持ちになった。

竹内好さんが亡くなられたのを、東京の友人からの電話で知ったのは、三月三日の夜半であった。病気が病気だけにありはと思つてはいたが、それが現実のものになると、わたしはしばらくぼう然とした。電話を置いて窓を開けると、吹雪であった。粉雪が舞う暗い夜空を見ながら、「とうとうあの約束を果たさなかったな」と、わたしは誰に言うともなく一人でつぶやいた。

「返済」と「不信」

中村智子

思想の科学事件——『思想の科学』の「天皇制特集号」（一九六二）を発売中止し廃棄処分にした中央公論社が廃棄号を公安調査庁の係官にみせた事件——への抗議として、竹内好氏は中央公論社への「執筆拒否」を宣言した。中公編集部だった私はその事態を解決するために、いろいろとうごいた。それはけっきょく、徒勞におわった。

一九六八年末の中公労組の「言論の自由問題」闘争は、組合内の分解を生み、シラケの時代をむかえることになった。そのさなかの一九七一年二月、竹内氏は「執筆拒否解除の申し入れ」を、会社にたいしておこなった。竹内氏はその理由を「理屈ではなく政治的判断だ」と、中公労組有志に答えている。

竹内好氏の「執筆拒否」の論理と倫理に、言論にたずさわる者の一つの規範をみていた私は、竹内氏の「政治的判断」に失望した。私は自分がもともと妥協的性格なので、竹内氏の峻厳さを仰ぎ見ていたのだった。

は「芝居が二幕目になっているのに、前時代の主役が舞台にとびこんできて、おごそかに場ちがいなセリフをしゃべっているような違和感をもった」と書いた。「長年にわたる課題であった執筆拒否問題のすつきりしない幕切れに、ふかい不信をもった」とも書いた。書きながら、「不信」という言葉にこだわった。

しかし、竹内氏の「執筆拒否」の論理と倫理からいえば、理屈の通らない「政治的判断」——それも状況になんのプラスももたらさない——は、竹内氏を規範としていた私を傷つけたことは事実だった。人間関係の信義を重んじて、私個人に「返済」してくれたという私情と、公の行為とは別だと考え、私は「不信」と書くことに踏みきった。

一九七六年十月末に、『風流夢譚』事件以後』という題でその本が田畑書店から刊行されてまもなく、竹内氏がガンで入院されていると知った。面会謝絶中だったが、竹内夫人が病室に招き入れてくださった。竹内氏はベッドの上で、天井にむけた目を大きく見開いたまま、荒い呼吸をしておられた。意識が定かでない先生に、「お元氣になって、いろいろお話ししてください」とだけやうと言って、私は涙をこらえて早々においとしました。それが竹内先生との最後の面会になった。私は「不信」と書いてしまったことに、こだわりつづけた。

鶴見俊輔氏の「竹内さんのこと—日録から」『思想の科学会報』八六号、一九七七年七月に、病床の竹内氏が小著について「よくやった」と言われたというのを読んで、私はようやく心が晴れる思いがした。竹内氏に生前お会いできたとしたら、「へっ、へっ」と聞こえる独得の笑い声をだして、「わたしは拒否は得意だが、妥協は不得手なので、どう

その「政治的判断」は、久野収氏がイニシアティブをとり、竹内好氏と日高六郎氏は四年まえに嶋中社長との座談会が失敗した因縁から、会社との会合にオブザーバーとして出席したのだった。事前に、竹内氏は私の意見をききたいと言い、私は今回のうごきにはいっさい関与したくない、と答えた。だから、それは抜きうちではなかったが、十年来、執筆拒否問題にきりきり舞いさせられた私には、不可解な解決であった。

私はそれきり、竹内氏を訪問することをやめた。竹内氏が階段から落ちて入院中ときいたときにも、気にしながら、お見舞いにも行かなかった。

かたくなになっていた私に、竹内氏のほうから声をかけてくれた。快気祝いに何人かを料亭に招待したなかに、私を加えてくれたのだった。そして「命びろいしたので、生きていうちに返済したかった」と、冗談まじりに言われた。私への「返済」とは、「執筆拒否」をめぐるもろもろのこと以外にはなかったが、にぎやかな食事の席でその話題にふれることは、双方きけた。

そのごお会いしたとき、私は思想の科学事件についての記録を書いていることを打ちあげた。「先生もだいぶ登場していただきますよ、悪役かもしれない……」と言うと、竹内氏は「いいですよ、たっぷり書いてください」と笑って、激励してくれた。以前はコワイ先生という印象だったが、峻厳な面のほかに、神経のこまかい優しい心くぼりをする人であることも、会社の仕事以外でお会いするうちにわかった。

その記録に「執筆拒否解除の申し入れ」のくだりを記すなかで、私もまずかったね」と言われたのではないかと、私は自分勝手にそんな想像をした。

その本のラストに、中公労組の「言論の自由問題」でたかった人びとが相ついで退社し、暗い「冬」のような会社になってしまった、私もなんども退社を考えたが、いまは白けたりくさったりしている人たちと「居直ろう、居坐ろう」とはげましあっている、と記した。いろいろな書評や手紙をいただいたが、会社を辞めないで中がらんばっているように、という激励が多かった。

しかし私はいま、竹内氏が一九六〇年の安保条約の強行採決に抗議して都立大学を辞められたことを、しきりに考えている。もちろん竹内先生と私ではまったくちがうが、職場を去る、毎月きまった月給をもらえなくなる、という条件だけは同じである。竹内先生に身の上相談をしたら、なんと答えるだろうか。「いいでしょう、まあ、しつかりやってください」。きつとそんなふうに言われるだろうと、私はまた自分勝手にそう思う。

竹内好氏は『みすず』の「ある抗議の顛末—私と中央公論社との関係—」（一九六七年七月）に、『おれはひょんなことで言論機関としての（商品の製造販売会社としてでなく）中央公論社の臨終の立会人になったな、ということである。もつとも、実際はすでに五年前に葬式がすんでいて、うかつな私がそれを知らなかっただけなのかもしれない。危機感のないところに言論は成立せず、そもそも言論がなければ自由も不自由もあったものじゃない。』と書いた。

一九六七年六月の時点では、この痛烈な一文は中公労組（会社側にも）に衝撃を与えた。しかし十年後の今日、同じ文章を突きつけられ

たとしても、おそらく無反応であろう。「言論機関」などという大時代な言葉は口にするのも恥ずかしいし、大出版社が商品製造販売会社であることは、いまや常識である。かつては嶋中社長でさえも「レコードなど作るつもりはない」と、他の大手出版社の「商品製造販売」を批判して、全社員の前で見得をきった。しかし今日では、レコードや画集の高利益によって社員の高水準賃金が維持されていることを、労使ともども諒承しあっている。

「原則」をかかっているのは、解雇されて六年ごしの裁判闘争をおこなっている九名の中公労組有志グループだけである。私も以前は「有志」のシンパとして、和解の提案をしたり、裁判での有志側証人になろうとしたが、私が書きあげた法廷用の陳述書に「有志」から納得しかねる注文をつけられて証人を降りて以来、疎遠になっている。

小著の刊行以後、会社から私が処分されるかもしれないと、社の内外の友人たちが心配してくれた。しかし、会社側はウンともスンとも言わず、何もしない。会社の翼賛会といわれている組合執行部も、私が『一九六八年末闘争記録』の「不許引用転載」という組合決定に違反して、たくさん引用しているにもかかわらず、不問に付して沈黙している。むしろ、それまでの落書きなどのいやがらせがピタリと止まって、以前よりも安泰である。

つまり、被害もない代わり、効果もない。社内の人たちも個人的にはいろいろな感想を話してくれたが、公に意見を述べる人はいない。処分されたら何かする、と言ってくれた人もいるが、何事もおこらないから、うごくこともない。もちろん、一冊の本を出したからといって状況が変わるはずもないが、いつか「冬」の会社に「春」がめぐって、

中央公論社へも郵送した。ところが、人事部長から「就業規則に抵触するので諒承しかねる」と、電話で返事があったそうである。私には一言の事情聴取もないままである。

就業規則には「社員の兼職を禁ずる。但し社で特に認めるときはこの限りではない」とあるが、「但し」によって、大学や専修学校の講師の前例があり、社長や重役は系列会社の役員を現在も兼職している。会社は今回も私にたいしては「無言」であり、そういう意味では「何もしない」といえる。私のほうは「特に認め」るお願いをする気もない。やはり辞表をだそう。

思い出という呪縛

金子勝昭

「逢うは別れのはじめ」とか「どうせ一度は死ぬ身じゃないか」などと歌っていて、なるほどそうだなあと、ちよっとした感傷を味わっているが、実はまだ自分に明日があると信じているから、死に直面しないし、死を見つめてはいない。といっても、年々人と永遠の別れをすることは多くなっているのだが、たとえば、竹内好さんが病気になる

てきて、社員のだれもがのびのびと個性を發揮した仕事ができ、言論機関としての責任を果たしていくような出版社になる日を夢みてい

る。と書いた言葉が、空しく宙に浮いている。そして相変わらず私の企画は通らず、最近では企画を提出せず、会社の机の前で読書三昧の生活である。不本意な部署に配転させられている人や社外の友人は「羨ましい、月給をもらって本を読んでいるなんて、いいご身分じゃない」と言う。

こういう状態に耐えぬくことこそが、「居直ろう、居坐ろう」ということなのだ、自分のいる場に「夢」をもつことなくして、この社会をよりよくしていくことはできないのではないかと、思う思いはさまざまある。と同時に、私は「自分だけの場」をもちたい、という思いがますますつづつある。

竹内好氏は執筆を拒否し、評論家廃業の宣言をだしたが、ライフワークの魯迅と取りくんで生きぬかれた。中央公論社というせまいワタから外へ視野をひろげれば、私のやりたい仕事はたくさんある。人生の持ち時間は無限ではない、というあたりまえのことも、身心ともに巖のように頑丈だった竹内先生が亡くなってしまふと、実感として迫ってくる。竹内先生は私にとって、やはり規範である。

付記——会社が私にたいして何もしない、というのはちがっていた私はこの四月から、東大新聞研究所の非常勤講師（一週に一回、二時間）として、雑誌論の講義をするよう依頼された。新聞社や出版社の人が毎年ここで講義をし、そのさい研究所から所属の会社に諒承を求める公文書をだすのが通例になっており（ことわられた例はない）、

て、お見舞いに行つたときには、もう手おくれたという状態で、つい先頃いっしょに海で泳いだことがまるで夢のようで、ぼくはそこでもう竹内さんと永遠に別れたような気持ちに沈みこんでしまった。

生きているときにはもちろん死は存在せず、死んだときには既に生きていない、だから人間は結局死と会うことがないのだ、という言葉があるけれども、事件とか病気によって死を覚悟せざるを得ない状況に永く置かれなかりは、やはり人は死に会うことがないのかもしれない。

逢うは別れのはじめ、というのは、人間関係においては真理である。ぼくがもし竹内さんと書物において接し、その表現されたものを活字を通してのみ受けていたならば、竹内さんとの別れはなかっただろう。書物はほとんど永遠に残る。だが、ぼくはたまたま、竹内好という名の個人に親しく接する機会を得た。幸か不幸か、というのではなく、このことは確実にぼくに託って幸であった。わずかの不幸があるとするれば、だから、竹内さんの肉体が消滅するとともに、それまでの交際が、思い出のなかに入ってしまったことであろう。

ぼくは出版社に勤めているので、有名人に会う機会が多い。文筆家でもタレントでも同じだろうが、有名であるということは、すでに印刷なり電波なりの媒体を通じて、なにがしかのイメージを受け手に与えていることである。それは、活字や映像によって作られた像と実際の人物とのあいだに、ギャップがあり得る、ということでもある。だからまた、そのギャップを埋めるエピソード（ときにはスキヤンダル）が、マス・メディアの商品となる。にもかかわらず、多かれ少なかれ、虚像と実像のあいだには深い溝がある。いや、虚像と実像という

よりは、もともとその見せる部分が違っているのである。

ぼくが新入社員だったころ、久保田万太郎に会ったことがある。ぼくは彼の作品が好きだったのだが、彼の風貌や挙措動作に接して、とたんに幻滅してしまった。愛読していた作品までが輝きを失った。これはちょっと単純すぎる話だが、好きな人には近づかないほうがいい、というぼくの思想形式の一部にはなっている。

ぼくは竹内さんの愛読者とはいえなかった。二、三の著書を持っていたが、主として魯迅の訳者として、ぼくの頭にあった。中国の会の会員になることによって、ぼくと竹内さんの接触は始まったのだ。しかし、実際に親しく接するようになったのは、どういうわけか、竹内さんを中心にした遊びの会に参加させていただくようになってからで、五年足らずの期間である。

竹内好像をあらかじめ持っていたわけではなく、また、会社の仕事に介在しなかったので、いわば自然のうちに、竹内さんに近づいていったという感じである。そして、竹内さんとのつきあいのあれこれを出そうとすると、たとえば質のいいスキン・クリームが肌になじんで溶け去った快い感覚はあるが、どこがどうしてという具体的な指摘はむずかしい、というようなくぐあいなのである。

竹内さんは、人の心に投網をなげかける名人だったのかもしれない。大阪高校の同級生である中野清見さんの書いたものによると、竹内さんはその頃、話しかけても笑顔ひとつ見せない、いつも胃でも痛むような表情をしている男だったのが、戦後になって久しぶりに会ってみると、人なつこい人間に変わっていた、という。ぼくの接した印象でも、竹内さんは、いつも目を光らせてはいても、おだやかな微笑

そして、いずれ、スキー教本の執筆と携帯に便利な折りたたみ式スキー板の発明することが夢だった。

酔いがまわり、話がはずんで、深夜におよぶ。それでも、翌朝いちばん早く起きるのは竹内さんで、手拭いを頭に乘せて温泉に浸かり、部屋に戻ると、冷蔵庫からビールを出して、朝飯前一杯をたしなんでいた。

ゲレンデに向かうときも、まっさきに準備がととのうのは竹内さんで、会合などにも早目に現われるのがふつうだったから、ややせっかちな人という印象をぼくは持っている。

スキー行の帰りみち、盛岡でわんこそばの食べ競べをやったことがある。雰囲気におおられて、つい真剣になってしまったのだが、竹内さんは「たくさん食べるには、おつゆは飲まないで捨てること、さしみなどの具には目をくれないこと」などと、やはり食べ方を分析しているのだった。

食べることにしたいへん興味を持っていて、見聞きした食べ物に関する情報をよく記憶しており、機会があるとその店で味わってみる。あるいは、わざわざその機会を作る人であった。

好奇心も旺盛だった。一つには、学者とか知識人といわれる存在がややもすると大衆から浮き上がったしてしまうのは、日常茶飯事のなかでの関心の偏りがあるからであろうことに對する反省があったのかもしれない。

ある旅館に、大人のオモチャの自動販売機が置いてあった。竹内さんは、コインを入れるといったどんなものが出てくるのだろうか、と言った。けれども、みずからコインを入れるのはさすがに照れくさ

投稿のご案内

- 一、テーマ枚数は自由です。特に、締切日はありません。
- 一、作品の返却を御希望の方は、その旨書いて、返送用切手を同封して下さい。
- 一、採否の決定は、『思想の科学』編集委員会が行ないます。掲載させていただいたものには、規定の稿料をお支払いいたします。

「思想の科学」編集委員会

を口もとにたたえて、やや皮肉な味わいの暖かさを身につけていた。東大、NHK、朝日新聞が嫌い（といってもその内実は単純ではなからうが）、市民運動や反権力のサークル、小出版社などには、できるだけ力は貸そうという基本的な態度をもっていたようであり、財政面でも頼りになる人と思われていたが、竹内さんはそこをどうやりくりしていたのだろうか。

スキーにはアフター・スキーの楽しさを欠くことはできないので、温泉のあるスキー場に行くことが多かったが、そんな時、若手のメンバーに「ストリップを見てらっしゃいよ」と、一万円札を握らしたりすることもあった。

スキー場の夜は、酒を飲みながらスキー談議に花が咲く。竹内さんは、すべて型にはまった教育がきらいだったから、スキー術にも独自の理論と教授法を持っていた。スキーの基本は歩くことであって、だから、基本姿勢は片足に乗ることであり、両足を揃えて滑るほうが例外である。人間にはボーゲン型とパラレル型があって、ボーゲンが不向きな人にボーゲンを教えてもあまり効果があがらない。などなど。

いようだったので、ぼくが代わりに買ってあげたことがある。いわゆる俗悪とされる映画も見ることがあったようだ。

このような思い出は、その思想と行動によって社会的に存在した竹内さんを支えている裏の部分に触れていることになる。裏の部分では、竹内さんは結局ふつうの人である。奇人、変人ではないのだから、当り前なことではあるが。とくに、奥さんが同行しているときのお互いの心づかい、また、二人の娘さんに対する思いやりを垣間見るとき、そこには主としてありふれた夫婦、親子の人間関係がある。

その暖かさにふれて、竹内さんをなつかしく、慕わしく思う反面には、竹内さんの突出した部分にだけふれたほうがよかった、なまぐさいぬくもりは切り捨てたいという、読者ないしはファンとしての気持が、わずかながらぼくの気持の底に沈んでいる。つまり、なまじっか竹内さんの私的な面にも多少でも接したということが、竹内さんが残した仕事、その思想を理解する上でプラスに作用するだろうか、という疑問がある。ぼくは竹内さんを自分の思い出のなかに閉じこめてしまふような気がする。

しかし、事実、そのようにして竹内さんはぼくのなかに存在するのだ。思い出は再生産を営まない。思い出は、同じ夢の繰り返しだ。

一周忌に近く、竹内さんを偲ぶスキー行があった。宿での夕食に鍋料理が出た。飲み、かつ食べて、ご飯になったとき、だれかが言った。

「竹内さんがいたら、鍋のなかにご飯を入れて、雑炊にしたでしょうね」

その時また、竹内好さんの肉体はすでに存在しないのだと思い、残っているのは思い出だけだった。

「人間・竹内好先生」の側面

沓沢喜勝

竹内好先生がこの世を去って、ほぼ一年の時間が過ぎたいまなお、私には先生の死が信じ難く、もしかするとこれは夢ではないかと思ひ続けているのは、実生活の面で竹内先生と私との間に越え得ない距離があることを感じ続けていることと矛盾があるのですが、死を認めることによって襲ってくる、やりきれない重苦しさや耐え難い悲しみを、回避しようとする心理作用が働いているためかも知れない。東北地方の片田舎に住む、身近に接することの少なかつたいわば辺境人の感傷だと言われればそれまでだが、しかし、それはそれで、誰にも譲ることのできない私の特権でもあるわけだから仕方ないことである。

あるいは夢の中であるかも知れない、先生の思い出を綴ることにする。

竹内好先生の広い視野の片隅に、私が、点にも及ばない微小な存在としてしる入られて頂くことになったのは、六〇年安保で、都立大の教授を辞められた直後のことである。先生のよわい五十、私は三十歳弱とする。先生の寡少な趣味の中でも、スキーには最も時間を割かれたのではないかと思う。私も、何回かお伴をする機会に恵まれたのでしたが、スキーに向けられる情熱には敬服の他なかった。雪国に生まれ育った私が、引き揚げようと思っている猛吹雪の中でも、近くにありスキーハウスの方を見向きもせずに楽しそうに滑っておられた。吉祥寺では、冬にさえなれば風邪を引き、気管支を傷めて、奥様が心配そうに見守る中で、いつも咳き込んでおられるのに、スキーの山に来られると、風邪が吹っ飛んで仕舞う様でした。

一九六五年三月に、「中国の思想」研究会の若いグループ二十名程を率いて、山形県の白布高湯温泉西屋に、合宿勉強会で来られた時は、前にスキーで捻挫をした足首にギブスが嵌めてあり、痛そうに跛をひいておられたが、午前中の厳しい勉強会が終わると、午後は若者達と近くの天元台ゲレンデに出て、ほとんど片足で滑っておられた。ご夫人と長女の裕子さん、次女の紹子さんも一緒に滑りましたが、止めても止まらぬらしかった。もちろん医者にも厳しく禁じられていたらしい。

蔵王にも何回か来られたが、大抵は何人かの同行者がいて、一人旅というところは減多になかった。奥様とお二人だけで来られた時、猛烈な吹雪が一夜明けても治まらず、恰度樹氷の颯々だったのだが、先生が奥様のことを気遣って、止むなく一回も滑らずに下山したことがあった。その時は、宿の部屋に籠り、奥様を相手に将棋を差して過ごされた。審判役に回った私は、時々役目を放棄して奥様の応援をした。私の応援が怪しいことが主因で、奥様は「待った」を連発されるのだが、最初に一言「特別見逃してやるよ」と言われただけ、あとは何も言わず、ただ笑って頷いておられた。

の時でした。既に、青春を通り過ぎていた私は、当時青春時代から持ち越していた未解決の思想上、あるいは処世上等の様ざまな問題を抱え込んでいたこともあって、先生のご迷惑も意に介さず、折に触れハウトゥ式の、難問、愚問を発していたように思う。遠く離れていて、警咳に接する機会の少ない私は、先生が懇切な返事をその都度下さるのを良いことに何十通もの手紙で発問した。質問の内容は厚かましくもいつしか私ごとにも及ぶようになっていて、独身主義を貫こうとしていた私は、結婚問題についても悩みを訴えたのであった。先生が折り返し寄越された返事は、人情に溢れ、温かい血の通ったもので、最後に「結婚は決して人生の目的ではなく、生活の手段である」と結ばれてあった。もし先生のこの言葉がなかったら、私は今でも独身を貫いていただろうと思う。結婚式の日取りを決める段になって、ぜひ参列したいから、予定の組まれていない日にして貰えないかと、日程を克明に書いた手紙を頂いたのですが、親戚縁者の詮無き事情で、ご臨席を頂けなかったのは残念でならなかった。

私の本棚に、真新しいばかりのツアースキー用シールが飾り物のように納まっている。これは、十年程前、竹内先生から頂いたものである。「もうツアーをすることはないから使いなさい」と言って下さったのであるが、私も三度使ったきりで、ツアースキーの機会がなくなった。折角実用に頂いたのではあるが、この際思い切つて、奇麗に手入れをして保存することにした。先生は、恐らくパイプをスパスパやりながら、大きな眼を細めて苦笑しておられるでしょうが、私にとっては、唯一の形見となったのであるから、そう厳しい叱責はないだろうと思っている。この本棚のシールが、眼に入る度に先生の面影が髣

樹水の最盛期で運よく晴れ上がった時があった。その時は、現在早稲田大学の講師をしておられる、柿の会の西野広祥さんが一緒に滑った。地蔵からざんげ坂を降り、樹水原コースを滑ったのですが、コースの右端を滑っておられた先生が、途中で突然転び、そのまま動かなくなつた。後ろに付いて滑っていた私は、四度目の捻挫ではないかと心配になり、急いで近寄ると、強い紫外線を浴びてほんのり日焼けした顔を綻ばせながら「この辺で一服しないかね、少し疲れた」と言われる。私は何よりもほっとしたが、同時に驚きもした。私も疲れてはいたがスキーでのこのような休憩の仕方は経験がない。何処かから西野さんも寄つて来た。三人でスキーを履いたままその場に横になり、足を投げ出して煙草を吸った。私は、持っていた蜜柑と茹卵を出した。茹卵を食べ始めた時、先生が「この卵は味が濃くて美味い」と言われた。西野さんも「沓沢さん、これは市販の卵ですか?」と不思議そうに聞くのである。実は、私が鶏を五羽飼っていて、その卵なのだったが、お二人の舌の感覚の鋭さには舌を巻いた。しかし、転んだままの姿勢での一服とは、見ることもなかった冬の風物を、自らも演じた訳だが、忘れることのできない楽しいひとときであった。

一人旅の時は、大抵大きなリュックに仕事を詰め込んでおられたようである。筑摩書房の『現代日本文学大系』第七八巻（中村光夫・白井吉見・唐木順三・竹内好集）の折込み月報に、福島の高妻高原で私が撮影したスキー姿の写真が載っているが、その時も魯迅の個人訳を持って来られた。予告なしにひょっこり拙宅を訪ねて来られた時もそうであった。その折に、何か書いたものがあるかねと聞かれたので、あると答えると、そのうち見せなさいと言われた。私は発表する意志などは

全くなしに、折に触れ書きなぐっていたものを、探し出してお目にかけた。これは間もなく、ある出版社との縁で『孤立無援の訴状』という題で本にしたのだが、その時先生は、感想文を書いて下さると申された。初めての本に先生の感想文を添えて頂けるのは願ってもない光栄なことなのだが、自分の文章が出来なために、先生の名を汚すのを恐れ、折角のご厚意ではあったが甘えることはできなかった。また出版社を紹介して下さるとも申された。それももう決まっていたからとお断わりした。すると、役に立つようだったら、いつでも私の名前を使って構わないと言って励まして下さった。身に余る光栄を感じ有り難かった。本になってからも、その中に書いたことで、大江健三郎さんから私への伝言を先生が取り次いで下さったり、時折、本の売れ行きについても聞かれた。

先生は、魯迅の個人訳の仕事場を探しておられたので、山形の銀山温泉をお奨めした。閑静な環境でしかも小さいながらもゲレンデが付いていることから、気に入られたようで、ぜひ実現したいと言われて、何回か計画を立てられたが、いつもよんどころない事情が皮肉にも発生して流れた。その時も、公的機関のルートを一切使わないという絶対条件がもちろん暗黙の了解事項としてあったわけである。

竹内先生は、公私の別には厳しくけじめを付けておられた。そして公より私に重きを置かれていた。いや、むしろ私が全部で、公を無能力と見ておられた節がある。それはまた、すべての組織は、程ほどに小さくしなければならぬという哲理が先生の中にあつた現われのようと思う。徹底した不従順の姿勢は、公に対するものであり、事大信奉者に対するものであつた。この思想を、埴谷雄高さんは「生まれなが

らの無垢な国士性」という道言で表現しておられる。

したがって竹内先生には、野に徹したという表現は必ずしも適当でないように思う。何故なら、まさに生まれながらにして、全身が在野そのものとして、自然な姿でわれわれの前に在ったのではないかと思ふからである。

永年の知友武田泰淳さんを亡くしてからの先生は、傍目にも感じられる程落胆しておられた。泰淳さんが亡くなる前年の十月二日、私は、「内山書店創立四〇年・内山完造生誕九〇年を祝う会」に招かれて学士会館の会場に出席した際、会場で先生と泰淳さんにお会いしたが、泰淳さんが病み上がりとはいえ、あまりにもやせ衰えており、ただごとではないように感じたことを思い出して話すと、そうだったのか、いや気が付かなかったと言われて、残念そうにしておられた。その頃恰度『魯迅文集』第一巻が発行されて間もなかったが、全身が痛んで、眠れない夜があると言われた。転倒事故の後遺症と泰淳さんの葬儀で疲れたのだろうと言われるので、私も眠れないというのが気にかかったが、鍼をすると少し楽になるとも言われたので、それ以上気に止めなかった。

そして、発刊の祝いを申し上げると、いやまだ早い、訳も残っていないし、注釈の方がだいぶある。来年の秋までには遅くとも出る予定だが、それまで体が持つかどうか分からないと言われた。私は驚いて、先生らしくないことを言わないで早く元気になって下さいと言ってお別れしたのだった。

本棚のシールは果てしなく語り続けてくれるが、夢ならこのまま醒めなくともよい。ただ夢であつて欲しいと願うばかりである。

だった。一カ月の短い旅のあと、竹内さんと酒を間に話す機会があつた。

『もう精神も衰えて、隠棲しているからね。出かける元気はないが』と、私には、竹内さんの話の定冠詞のように思われる前置きも消えぬうちに、いろいろと質問をくり出して来られるのだった。まず、食べものから始まる。短い旅ゆえにいかに体力調整に心をくだく必要があつたか、などの弁解は意に介していただけない。土地の食べものの辛さ、酸っぱさ、草の香り。魚の姿、かたち。もちろん料理方法にも及ぶが、推測の域を出ない。次ぎは酒。探求心のおもむくままには手をのばせなかったことなどつぶやくと、まずそうにパイプに火をつけられるので、せめてビールの銘柄など報告する。人びとのものの食べ方、交通の手段。話はこまごまと色あざやかに。竹内さんのあいづちに励まされて、しきりに記憶をたどるうちに、いつか竹内さんにもみちびかれながら、もう一度、アジアの土地を流れ歩くふうになる。その、具体的なものへの親しみ、興味は竹内さんの状況判断の支柱になるのだから。

やがて新聞報道に話はつづく。『向こうに行つて特派員は何をしっているのだろうね』。せいぜいそのような切り出しのだが、インドシナ半島で、またその周辺諸国で、日本の新聞記者たちが、日常どのような形で情報を集め、状況判断をしているのか。市井の隠者の関心のもちようとしてはかなり具体的であり、少なくとも大状況を問う発想はないのだ。

一九六〇年、安保闘争のさいの新聞各社による『七社共同宣言』を直接の動機として始まった竹内さんの新聞批判はよく知られている。

竹内さんの励まし

中村輝子

竹内さんの一周忌にあたる三月三日の夜、竹内さんとかすかなつながらりを持つ、一人の新聞記者の会があつたことは、むろん偶然ではあつた。

その日、共同通信のブロンペン支局にいた石山幸基記者が、カンボジアの解放戦線側に取材のためにもぐり込んだまま、行方不明となり、すでに四年数カ月が過ぎているのだが、たまたま、彼の家族を励ます会が同僚たちによって開かれたのだった。竹内さんの確かな不在と石山記者の不確かな存在への感情は、私の記憶の中の二人の交差点をあざやかに思いおこさせた。

一九七三年二月、インドシナ半島の戦争が混沌状態のまま続いているところ、私は、カンボジアにはじまる東南アジア四カ国の取材旅行に出かけた。その前年まで、共同通信の企画「アジア学の展開のため」を続け、中国を見るための、複数の視点を設定しようと試みたものの、不十分に終わつた反省を心のすみに抱えての、東南アジア体験

言論機関の名を捨て、企業意識の陥穽にはまった大新聞への絶望を明らかにしていた。新しい新聞を作った既成のメディアと対決する可能性を求めて、『小新聞の会』を組織し、まず、敵を知る。ための研究を、編集者、研究者と共に重ねたものに知った。不偏不党主義と独占型の日本の新聞に対抗する手段は、しかし、どのような理由によって立ち消えになったのか。雑誌『中国』の発刊の中に、その可能性は吸収されたのか。六十二、三年の日記抄である『転形期』には、新聞の会にいくたびか足を運んだことは書いてあるのだが、その志の行方については書かれていないので分からない。くわしく伺う機会を逸したままになってしまった。しかし、新聞報道に対する感想のち方と記事批判を通して状況に見通しをつけて行く姿勢には、竹内さんの、ジャーナリズムに強く見開かれた目が感じられて、私たちに覚悟をさせるものがあつたことは事実だ。

私は恐らく、雑誌『中国』の自主刊行のころから竹内さんと顔を合わせるようになったと思うが、『政治に口を出さず』『世界の大勢から説きおこさない』中国の会の取り決めの中に現われている、日本の現実への断念は、そのまま、ジャーナリズムへの問いかけなのだと思います。『評論の筆は断つた』と宣言されたのも同じころである。しかし、安

保闘争の時代から、共同通信には、小なるが故の期待をもたれたのだろうか。その後も協力していただいたが、私たちとて、決して竹内さんの批判をまぬがれていない以上、その存在感はいっそう大きかったように思う。

日常のことどもの延長で、話が新聞報道に及ぶのは私との会話の常

だったが、石山記者のいら立ちを聞くのはつらかった。その時、彼はその半年後に歩いて行く道を予感していたのだろうか。『若い人はいい、大記者』になっていないからね。しかし、気にかかると竹内さんはいふ。はじめて日本の外に身をおいて感じたあらゆる憤慨を大記者風に処理する術もなく、あらわに見せている記者は、『そのうちいいものを見つけて来ますよ』ともいふ。日本のベトナム報道が、『アジアの心』に戸惑うようすもなく、いかにもわけ知り顔に書かれることを最も不満に思っていた竹内さんらしい励ました。

その年の十月、石山記者は、プノンペンの北にある古都ウドンから解放区取材に出発したまま、消息を断つた。

彼の日頃の熱意を知っていたカンボジア人の助手が、解放区側がわりと自由に出入りしているウドンの市場で、向こう側の人物と接触、交渉した末、開けた道だった。解放区側からの指示通り、一般の住民と同じ黒いシャツにサンダル、クローマーとよばれる赤と白のチェックのカンボジア風タオルを首に、自転車に乗って、一一四号道路を村人と一緒に走って行ったという。

彼は帰国を目前にしていた。三週間足らずの解放区取材は彼にとつて自分の報道にけじめをつけなければならぬ、最後の試みだったのだろう。いかに安全を期して手はずをととのえたとはいえ、大きな賭けであつたことに変わりはない。さまざまな情報が数カ月の内はあつたが、戦火の激化と共にとどえてきた。

七四年春、『アジア学』を本にするための話し合いをしている時、竹内さんに、あの、プノンペンの記者の行方不明を伝えた。ちよっ

であつたといっている。

その時、交戦中の国という予想を裏切るほど戦意を失っていたプノンペンの数日を竹内さんに語ったのは偶然ではなかつたように思う。竹内さんが『向こうの特派員は……』といった時、特派員という身分に安定できないでいた石山記者のことがまず思い出されたのである。

竹内さんは石山記者に会つたことがない。石山記者もジョージ・オーウェルには情熱を傾けていたが、魯迅と格闘したという形跡はなく、文化部記者時代も、あえて竹内さんを訪ねるふうもなかつた。オーウェルの短いエッセー『右であれ左であれ、わが祖国』を訳した彼が、竹内さんとナショナルリズムについて議論すれば、また面白い展開があつたかも知れない。

プノンペン支局に赴任して四カ月ほど経っていた石山記者は、ちよつと霧に包まれたカンボジアが輪郭をとって見えて来はじめた時であり、それだけに、報道のあり方にも焦りが深まっていた。毎夕の政府軍情報部の発表を待ち、見えぬ解放戦線を想像する日々。ロン・ノル政権下の腐敗したプノンペンから出ることのない閉ざされた毎日。主としてストリンガーが多かつたが外国の記者たちは、本国の、コントロールを気にせぬ発想と行動をするので、彼らとつき合う方が面白いともいふ。アジアの中に身を置いて、変わってくる自分を見れば見るほど、日本の、そして組織の条件の中で報道する不自由さが、本意でないものとしてふくれ上がっていたのだ。町はずれのフロン・バサックの屋台で、激した口調で語るのは、おのれを含めた日本の新聞の、事なかれ主義、組織原理への同化だった。私には、例えばストリンガーの限定つきの自由さが良質の報道を保証するようにも思えなかつたと思う。

と目をむくように動かしただけで、あまり表情も変えない竹内さんは、『それはつらいね』とぼつりといわれた。竹内さんにもある予感があつたのだろうか。石山記者はおそらく、一年間の体験の終わりに、矛盾のない場所へ働くことの幻想を捨てていたに違いない。それからこそ、その力が期待できたのだが、竹内さんは、記者の個人的な野心としてその問題は矮小化できない、というような意味のことをはつきりといわれた。彼の賭けは、野心の賭けではなかつた。彼の体験と思想を力量いっぱいに使って、状況を開こうとした道半ばのことだつたと思う。

私が、竹内さんに、会つたこともない一人の新聞記者の話をせずにいられなかつたのは、なぜだつたらうかと思う。自分の中にうつつするものは口に出せぬまま、竹内さんの励ましを期待していたのだろうか。思い返せば長い間、竹内さんから受けてきたものは、数少ない言葉にふくまれる励ましや響きだったような気がする。その響きに共鳴することによって、私は力を得られた。機会あるごとに竹内さんの思いを追うことによつて、私はそれを取りもどす。竹内さんを過去のものとして語るには一年はまだあまりにも短い。

*

*

国民文学論について

上野昂志

ここ二、三年来、わたしは改めて「国民文学」をめぐる竹内好の諸論考に関心をひかれるようになった。いや、改めてというよりはほとんど初めて、わたしは、竹内好の多くの仕事のなかでとりわけて「国民文学」論にまともに関心を抱いた、といったほうがいいかもしれない。それは、いささか奇妙なことである。というのも、つい数年前までは、「国民文学」論は、竹内の文章のなかではもともとつまらないものだと考えていたからである。以前本誌に書いたわたしの最初の竹内好論（七四年九月臨時号）でも、そのような観点をとっていたはずである。

「国民文学」論を、竹内好の仕事のなかで低く見るといのはわりあい一般的なようだが、わたし自身のことでは、大学時代に『国民文学論』を読んで、ひとつには「国民」ということばにまったく馴染めなかったこと、もうひとつには、そこで文学プロパー（と、そのころわたしが考えていた）の問題があまりに語られること少ないのに不

満を抱いて、以後ほとんど振り返ることがなかったのだ。「国民」ということばに馴染めないというのは、いまでも変わらない。日米開戦の年に生まれて戦後に物心ついたわたしは、このことばに具体的に被害を蒙ったということはないが、それでも、わたしの一身がこのことばで括られることにはどうしようもない抵抗を感じる。現実の関係性のなかでやむを得ずしてこのことばを負わねばならぬときがあるとは思うものの、具体性としてのわたしは常にそれを越えてあるし、ありたいと考えているのだ。その感覚は、あるいは大学のときよりもいまのほうがより強いかもしれない。が、ともかく、学生のわたしは、「国民文学」という呼称そのものに馴染めないものを感じたのである。いったい何故とりわけて「国民」―「文学」である必要があるのか、「国民」など不要ではないかと。

この感覚はいまでも変わってはいない。しかし、いまは、竹内が「国民」などということばを敢えて持ち出さねばならなかったことを、その負性において了解することができるという気がするのである。「国民」などということばは不要である。が、その不要なことばに仮託せざるを得ないものが、マイナスとして存在していたことを、いまのわたしはわかるように思う。それは同時に、彼がそこで文学プロパーで語ることの少なかつた理由もわかる、ということでもある。

論議としての「国民文学」をめぐる賑やかな応酬については、わたしはほとんど興味が無い。それは、本多秋五が概括しているように、『物語戦後文学史』、「共産党の政策のレール」を土俵にすることで賑わい、またその土俵に収束する程度にひ弱で実のなかつた論議にすぎなかつたということであり、ただ、それでも一九五一、二年当時には

たとえ党利党略から出た「政策」ではあっても一応は「文学」を巻きぞえにするくらいには日本共産党も威力(?)を持っていたという点で、今昔の推移を思わせるというぐらゐのものである。実際に、いまでは、そんな賑わいを演出しようとはできず、論壇であれ文壇であれそんな賑やかな論議を起さずともとうていできそうもないだろう。それ故に、竹内好が、みずからの「国民文学の問題点」という論文を指して「今となつては遺跡の感が深い」と書いたのも（評論集第二巻解題）、まことにむべなるかなである。論議としての「国民文学」はそれ自体では「遺跡」にすぎなくなつたのである。しかしそれは決して、本多秋五のいうように（同前）、「一人のプーシキン」が出なかつたからではない。

竹内好が問題にしたのは、かりに「プーシキン」で「国民文学」を代表させるとして、日本の近代文学に何故「一人のプーシキン」が出ないのかということではなく、現状がこのままなら過去も未来も「プーシキン」など出ようはずもないという絶望において、そもそもそれ

竹内敏晴著

ことばが劈か れるとき

著者は少年時代のほとんどの時期を、耳の病気のため、会話が充分にできない状態で過ごした。それを克服した体験を通して、人間の表現と伝達の問題を探る。声の問題は、発声器官だけの問題ではなく、体全体の問題である、という著者は、障害者教育、言語教育、演劇表現の分野で、独自の言語論を展開する。日本語論にもう一つの側面から問題を提起する。

第8刷発売中 四六上製 定価 一一〇〇円

思想の科学社

ひとつの作品が問題を解くかに事態は映っていたが、竹内にとつては、作品を生み出すことばこそが問題だったから、「非文学」的な議論を積み重ねるしかなかった。その「非文学」は、ほかならぬ発語の場を模索することを不可避免的に負っていることで本質的に文学的だったのだが、しかし政治は、その現われとしての「非文学」に、セクトとしての政治主義的言語をのせることで一切を破産させた。竹内の「国民文学」論は、「文学」に希望を抱くものたちの文学主義的言語と、すべてをセクトに回収しようとする政治主義的言語とに挾撃されたかたちで、この国のすべての論争の場合と同じようにその初発の問題性を四散させられたのである。彼が求めたものは、文学も政治もカッコ抜きで存立させるところの端的な、ことば、そのものであったにもかかわらず、である。

竹内好は、共通の、ことば、を求めていた。広くいえば「知識人」と「大衆」の分裂を止揚する共通の、ことば、であり、狭くいえば、たとえ政治家と文学者が、社会的な機能としては分離しながらもひとつの問題をめぐって平等に交わされるような共通の、ことば、である。共通の、ことば、はない、それが竹内好の前提とした認識である。ひとたびことばを発すれば、それは知識人のことばとして大衆の存在から乖離し、その上で、たとえば文学者のことばとして政治とは関わず、しかも同じ「文学者」の間にあつても、思想、信条、芸術意識、価値観等々の違いによって即座に流通不能となる。いや、というよりも、ことばの違いこそが、思想信条や芸術意識や価値意識の違いを枠づけ、文学者を政治家から隔てさせ、さらには自分自身の生活者としての肉体を疎外する、といったほうが正確であろう。竹内好

しかし、「国民文学」論議の実際は、ことあらためての「仲間のコトバ」の応酬であり、セクトにおいて転倒した職業としての「政治」によるコトバの引き廻しにすぎなかったのである。ここでは、何故か、「国民」ということばですら、状況の推移に見合った目新しいコトバとして消費されたのである。竹内好にとっては、「国民文学」などはすでに「汚された」コトバでしかなかったのにもかかわらず、である。

そして現在、「国民文学」論が、問題として成立するような場合は決定的に失われている。竹内好自身も一九六六年にそれを「過去の遺物」と呼び、それは現在が「亡国」の状態だからと説明しているが「予見と錯誤」、その後の十年余の時間は、いつそうこれを「遺物」化するように動いてきている。しかし、それは、竹内が絶望的に認識した「分裂」がなくなったということでは決してなく、「分裂」を不断に更新しては消費するという構造そのものが日常化したということなのである。あるのは、ただことばだけである。夥しい種類の「仲間コトバ」が、かつてはそれぞれの「仲間」うちに閉ざされていたのが、現在ではその垣根を取り払われて、商業主義的な一般性において消費されているのである。ここでは、「仲間コトバ」のセクト性は、商品の個性に、すなわち商標の個性に、そしてニューモデルの個性に置き変わっているのである。ことばこそ商品なのだ。それは、絶えず目新しいコトバを導入することで進歩してきたこの国の近代の窮極の姿にはかならないだろう。ここに竹内好の「国民文学」論が問題として成立する場はなく、しかし、まさしくそうであるからこそ、問題というコトバに概括されようもないものとして、それは現在を逆側から照射しているのである。

は、現にあることばが強いるそのような分裂に直面し、それを止揚する共通の、ことば、を求めた。彼が日本近代の「封建性」と呼んだものはそのような分裂状態のことであり、「植民地性」と呼んだものは、その分裂の解法を絶えず外に求めることでより分裂を深める構造のことである。分裂は戦争を通過することで社会の全体に顕在化し、しかも、その解法を求めて新しいことばを外にたずねることはよりいっそう分裂を深めることでしかないとするれば、彼は、分裂そのもののうちに分け入って、ことば、を模索するしかない。そのとき、対他的な統一性を表わすだけの「国民」ということばが、止むを得ずして選ばれたとしても仕方がないことであろう。それは、外に對しては侵略者として統一的にある日本人の、内における分裂を対象化すると同時に、かろうじて共通性の出発点を示すものとして選ばれたのである。

竹内を「国民文学」論に促したものは、「中国文学とヒューマニズム」などにはつきりと現われている認識——絶望と同じものである。「李嘉は、詩人として、国民的感情の上に立って、その上での自分のコトバで話している。日本人側は作家としての職業意識の上に立って、自分たちの仲間のコトバで話している」(傍点引用者)。この認識である。中国人の文学者という鏡に照らされて、ここでは我々の文学者のコトバの負性は竹内によって露に指さされているが、「国民文学」論にあつても内実は同じである。ただ、ここでは負性としてのみ自覚されたことを、敢えて問題として提出することで、「国民文学」論で竹内は攻勢に転じたのである。おそらくは、みずからの論を土台とすることで論議が聞かれ、それを通して、共通ことばが不在であるという事態だけでもせめて共通の認識になることを望んで、である。

「仲間ぼめをしない」ということ

佐高信

鲁迅は「死」という文章の中で、自分の死後、「記念に類すること、一切やってはならない」と書いている。

あるいは「私を忘れ、自分の生活のことを考えること。——さもなくば、それこそ大馬鹿者だ」とも。

鲁迅はこれを「遺書」という形で書いているのだが、私たちに鲁迅を教えた竹内さんも同じ考えかもしれない。

竹内さんが亡くなって、もう一年になる。しかし、私は吉祥寺の家に献花にうかがって、帰り途につぶやいた「竹内さん、安らかに眠るな」という理不尽な言葉を、いま一度ここでくりかえさずにはいられない。それは、竹内精神を継ぐべき竹内さんの次の世代の人たちが、私の眼から見て、竹内精神の最も大事な根幹の部分を引き継いでいると思われるからだ。そして、仲間ぼめ、に憂き身をやつしていると思われるからだ。

竹内さんは「対立物」というか、「敵対者」「対峙者」をつねに頭の中

におき、それへの目くばりを忘れなかった人である。たとえば「毛沢東を知るためには国民党史をやらなければならない」と言っていたそうだし、日常的には、左翼のニュースを反共的立場で速報するからという理由で『読売新聞』を購読していた。

好悪の感情をおさえてそうするというより、好ましいと思うものをヨリいっそう明確につかむために嫌いなものを調べるという、いわば「弁証法的態度」があった。そのために「仲間ぼめ」をしているヒマなどなかったのである。

思想把持に欠かすことのできないこうした態度が、竹内さんの次の世代の加藤周一、日高六郎、鶴見俊輔といった人たちにはまったく言っていないほどない。竹内さんの死に、私が未だに齒がみするユエンであり、口惜しく思う理由である。

たとえば鶴見さんが選考委員会の座長となって編まれた『現代人物事典』には渡部昇一が出ていない。細川隆元も、立花隆も、牛場信彦も、法眼晋作も、そして笹川良一も出ていない。これらの人物は、私も好ましく思う人物ではないが、しかし、これらの人物の影響力を過小評価しては、平衡感覚を失うのではないか。私は、嫌いな人間をこそ、この事典で知りたいと思つて買ったのだが、何か、「現代仲間事典」の匂いをするものをつかまされた感じである。この匂いは、人選だけでなく、内容にも及ぶ。

たとえば加藤周一氏について、日高六郎氏は「国際的な場でも十二分に評価にたえる、すぐれた思想家である」と書いているが、日高さんは本気でそう思っているのだろうか。

「高い板塀をめぐらし」た家に住み、「世間の風からばかりでなく、家だけでなく、内容にも及ぶ。」
たとえば加藤周一氏について、日高六郎氏は「国際的な場でも十二分に評価にたえる、すぐれた思想家である」と書いているが、日高さんは本気でそう思っているのだろうか。

思想は学べない。ただ、つかみとることができただけということ、竹内さんはよくよく知っていた人である。

もちろん、ストレートには比較できないが、竹内さんの編んだ『アジア主義』や『近代日本と中国』と『現代人物事典』を比べると、鶴見さんたちの目くばりの不足がよくわかる。

竹内さんが「仲間ぼめ」をしなかったということは、本気で引っくり返すことを考えていたということであり、そのために、つねにヨリ多くテキキの方を見ていたということである。そこから、久野収さんが「弔辞」で紹介した次のような、迫力ある、話も生まれてくる。

六〇年安保闘争で、竹内さんの正面の敵手であった岸信介が、その後、竹内さんのアジア認識を聴講したいと切願したというのである。テキキをも惹きつけずにはおかない強烈な「毒」が竹内さんの思想にはあったということであり、それはテキキへの目くばりを忘れない竹内さんの冷徹な現実認識、現実感覚から生まれるものだった。

現実感覚といつても、竹内さんのそれは、現実の上っつらだけをなせる現実追認、現実追隨の感覚ではない。現実の底を見ぬき、それを変革しようとする感覚である。

たとえば、私の愛読する『転形期 戦後日記抄』の一九六二年九月十一日の項には

庭のなかでのあらゆる問題から、また子供が自分自身についても問題からさえも、注意深く隔てられ「て育ち、旧制一高から東大という超エリートコースを歩きながら、その著『羊の歌』で、自分を「現代日本人の平均にちかい」と書くほど平衡感覚、あるいは現実感覚の欠如した加藤周一氏を、日高さんは本気で「すぐれた思想家」と讃美するのだろうか。

本多秋五の『物語戦後文学史』によれば、竹内さんは「王国維特集号を読む」(『中国文学月報』一九三七・六)で、そこに執筆した同人たちの論文を遠慮会釈なく批判し、満身の力をこめて相手の横面をはり曲げているという。「中国文学研究会」には、こういう相互批判が行なわれて、しかもケンカ別れもしない交友関係があったわけだが、それは単に「若さ」ゆえだったろうか。

竹内さんについてはそうではなかったことが、桑原武夫さんの追悼文『展望』(一九七七年五月号)を読むと、よくわかる。

桑原、竹内、谷川雁の三人で、うなぎを食べ、竹内さんが「墜落した「風紋」へ行ったら、桑原さんが、自分では出来の悪いほうだとは思っていなかった「論語」の註解が、筑摩書房から届いているはずだがと言ったら、竹内さんは言下に「お遊び」とだけいって、にこやかに笑ったという。

こうした峻烈さが、どうして次の世代の人たちにはないのか。竹内さんの亡くなったあと、加藤周一氏は『朝日新聞』の「文芸時評」で二回を費して竹内さんへの「個人的謝辞」を書いてきた。しかし、こうしたことを竹内さんは喜ばなかったのではないかと私は思う。加藤さんが、どうしても竹内好を語りたのなら、たとえば渡部

「ニセ札に報償金がついた。三千円以上という。今まで発見されたものだけで二百枚に近い。これでまた話題になるだろう。ただ私は、ニセ札をあつかうジャーナリズムの態度が気に入らない。ニセ札とは何か、本物とは何かをもっと疑わねばならぬのに、そうしていない。必要流通量以上に放出される通貨はすべてニセではないのか。お上の御威光がうすらいだ今ではニセ札感覚も変わっているはずなのに、その機微をとらえようとしない新聞記者や漫画家はみんなナマケものだ。ニセ札事件をインフレーションと結びつけて論じる評論があらわれぬのはおかしい。ニセ札の鑑別法や図柄だけが話題になるジャーナリズムは健全でない。これは左翼ジャーナリズムをふくめての話である」とある。

竹内さんは別のところで「教育とは加えることではなくて、変革することである」と言っているが、まさに私たちは、こうした「瞠目的ニセ札論」を展開されることによって衝動的にイメージを変革されたと題して、

また、私の編集している雑誌で、去年の秋「台湾、孤立の中の繁栄」という特集を組んだら、ビックリするほどの反響があつて、改めて台湾がマスコミの中のエア・ポケットになっていることを知ったが、竹内さんはすでに、一九六九年二月号の『中国』で「もっと台湾を」と題して、

れを感じる」と書いていることを、今度、『中国を知るために』を読み返して知って、再々度、脱帽した。

私は、やはり去年の秋に出した『ビジネス・エリート意識革命』（東京布井出版）という本を、

「ドレイとドレイの主人はおなじものだ、という魯迅のするどい警句を引きながら、竹内好氏は、人間の解放は、ドレイがドレイの主人にのしかかることによってではなく、人が人を支配する制度そのものを改革することによってしか実現しない、と述べているが、現在の企業という封建社会、あるいはドレイ社会の改革も、この方向によっていかなしえないであろう。そのためにもまず、ドレイ精神からの脱却が主張されなければならない。

現在の企業という封建社会の中では、上司の命令に黙従する社員になることも、部下に専制権力をふるう社長になることも、同じく『精神のドレイ』になることなのだという視点に立って、ドレイ精神からの脱却を図ることが『企業人革命』の出発点であり、また到達点だからである」と結んだ。

決してカガク的ではない「ドレイ精神」というコトバを使わなければ、企業社会の封建性は描ききれなかったからである。この例でもわかるように、竹内さんのコトバは文学的ではあっても社会科学的方法ではない。しかし、それは現実に深く根を下ろしていることを示している。

竹内さんの、威を借りて、独断的に書いてきたが、最後に、竹内さんと魯迅をダブらせながら、『現代中国論』の中の次の箇所を引いて結びとしたい。

いうものの得得主体の側には氏も、より理解するには、やはり、年をとっていかなくてはならない対象なのであると考える。違った意味と述べたが、しかし私には竹内好氏と悪魔性とは重複する所、少なからずの感がある。それは政治的成熟または権力志向等々の要素としてではなく、人の痛みをいやさせまいとする、痛みを痛みとしてさらに自覚させようとする、存在様式を覚醒させる肉体言語によってそのようなのである。これが啓蒙者といわれ、さらには後に自己に沈黙を律した竹内好氏のダイナミック性なのであるまいか。竹内氏の個性的な思想性をより主体的に修得しようと欲するならば、やはり年をとらねばならない。

私には、これが立証されている。二年前の五月に行なわれた「名古屋市民学校・松本健一講演会」にて竹内好氏を問題設定したが、私には竹内好という人物がよく理解できなかった。氏の人としての生活と思想性とを密着して捉えながらも、鋭利に切り離すその作業の無限の苦渋さが、生活を媒介としてとは、とても言い難い私の発想には、既に経過し得たものとしてしか映らなかつたのである。そう、理論的繊細さを感じられなかつた。

だがしかし、理論がただの単語の羅列としてしか、また、空回りばかりしている熱情の乾きは自己に狂気の世界をほうふつさせる。経過した、いや経過が何らみるべく精神的作業を経過していなかつたゆえに、生活を媒介として形成されなかつた思想的脆弱性が必然的に私に鮮明となる。そして生活とは何か、生きるとはどういう事かを自問してみよう。自問作業が安易に合理化されたり、曖昧であるとき、竹内氏の語る言葉は痛烈である。抵抗のないところに敗北はおこらず、抵抗はあっても、その持読しないところに、敗北感はず覚されない。……

「日本文学にとって、魯迅は必要だと私は思う。しかしそれは、魯迅さえも不要にするために必要なもので、そうでなければ魯迅をよむ意味はない。」

成 熟

小島正憲

最近、何故か年齢を気にするようになった。諸々の感慨の内一つ画然とした確かなものがある。それはマックス・ウェーバーが『職業としての政治』の中にて「悪魔は年をとっている。だから、悪魔を理解するにはお前も年をとっていかなくてはならぬ」(『ファウスト』第二部)を掲げ、「政治を行なう者は、すべて暴力の中に身を潜めている悪魔の力と関係を結ぶのである。」と戒めていることである。年をとるとは、それに相応した成熟度が問われるのであろう。特に政治領域においては、その悪魔的成熟度もいうべき政治性が要求されるのである。

この悪魔的要素をより理解するには、もっと年をとらねばならないであろう私に、竹内好氏はまた、違った意味において、いや成熟度とむしる敗北は、敗北という事実を忘れる方向に自己を導くことによつて、二次的に自己に対して、したがってまた決定的に、敗北することが多い、その場合は当然、敗北感の自覚はおこらない。敗北感の自覚は、このような二次的の自己にたいする敗北を拒否するという、二次的な抵抗を通じておこるのである。『中国の近代と日本の近代』

私はこの言葉を非常に情け容赦のない悪魔的響きをもつものとして受け取めている。これに静寂な底力を強く感じると同時に、自己を律するということの竹内氏の独特の言い回しがみうけられる。それはつまり、踏みとどまること、つまり抵抗の持続なのである。それは持続の為の抵抗でもあり、抵抗の為の持続なのでもあろう。氏の文体全体に漂う悪魔的な鈍角的鋭利性は責任倫理をふまえているゆえに説得性と感慨を有する。

「ドレイがドレイの主人になることは、ドレイの解放ではない。しかしドレイの主観においては、それが解放である。」(同前)これは、存在が持続すること即ち、生き方そのものが抵抗であるといった墮落への戒めだけではない迫力を感じさせるが。この思想の肉体化には自己の発した言葉が、それ自体一個の独立した概念として自己の精神の狭間にくい込んでこようが、正面戦を辞さないといった氏の成熟度を、つまり生の現実の直視に耐え抜いた者の痛みと重みをもって相手の存在様式をズッシリと問う悪魔的語りである。

恐いことを考えるならば、人生の帰結に対する何ら配慮もなく、心情倫理的に竹内氏の肉体言語を表面的にとらえて生きてゆくならば、必ず手痛いしつべ返しを受けるであろうことは、この私にも分かるつもりである。その語られた背後に潜む悪魔性をじっくりと見てやろう

とするならば、如何なる情況がこれから起伏するか、またどういった生き方を選択するかによって影響されるが、ただ確かなのは、多面的な年を積まねばならないであろうことである。つまり成熟せねばならない。

竹内好と「偏見」について

加藤明登

書物との出逢いは新しい言葉との出逢いでもある。以前から知っている言葉でも新しい意味を知ることにより、新たな地平が開かれたような気がするし、特に知らず知らずのうちに身につけてしまった言葉がある。日突然別の意味を帯び、人生観が一変することだってある。たとえばひとつの言葉、それは自らの人生にとって重要である言葉を選び、その言葉の意味の変遷過程を自らの成長の過程として捉え、自らの精神史を垣間見ることができるともいえない。

ここでは竹内の「偏見」という言葉、つまり『転形期』一九六二年六月二十一日の項にある「偏見はたのしい。しかし無智はたのしくない」の「偏見」について考えてみたい。

件としない講和は反対であるという論との対立についてである。竹内は「反対論の方がはるかに理路整然としていて、少数の賛成意見は、すべての点において、論破されつくしているように思う」と言い、続けて「それにもかかわらず、たとい議論で勝っても、明治的教養人の心情に立ち入って、かれらを納得させることは、おそらく不可能に近い」、そしてその心情は「日本国民の心の片隅に盤石のごとく巣くっている」ものであると指摘している。この場合問題なのは、正当論でもって論破することではなく、心情まで立ち入る微細な考察が必要なのだという点である。つまり正当論だけでは問題は解決しないし、このような論争は不毛なことが多い。

さて「偏見」という言葉にみる竹内のたのしいという表現、そしてこの論争にみる竹内の指摘は、竹内の深い人生の機微に対する洞察によることは明らかであると思う。一体この洞察はいかに獲得されうるかが次なる問題である。

つまりこの洞察は、竹内が自らの「感情」に忠実であること、その感情を丹念に追求した中で獲得されたもののような気がする。たとえば「日本共産党批判」の中で竹内は「私の文学的直観によれば」と書き始めるのである。つまり、コミンフォルムの批判に対して全面降伏した日共の思想の一貫性を問うのに「私の文学的直観によれば」と書き始めるのである。例えば私達の判断の最も基準になるのは、この「直観」によるしかないのではないのか、勿論、ウェーバーの言葉をかりるなら「修練によって生の現実を直視する目をもつこと、これに内的に打ち勝つ能力をもつこと」による研ぎ澄まされた直観である。さらに「ナシヨナリズムを欲するならば、どうしたらよいか、ウル

私達はしばしば会話の中で「それは偏見だ」とか、「偏見でものを言うな」という表現で使うように、決して良いイメージの言葉ではなく、この言葉を聞くと余り気分のいいものではない。ここでの竹内は「無智」との比較ではあるにしろ、「たのしい」という表現は明らかに肯定の意味で使っている。偏見がたのしいとは一体どのようなことなのか、少なくとも偏見をたのしいという意味で捉えたことがない私にとって、否むしろ、心の中に常に存在する偏見的な考えを無くしようと努力し、そして苛立ち、その罪悪感と闘ってきただけに正直なところ理解できないことがらであった。

しかし翻って考えてみるならば、偏見がたのしいということは確かにある。たとえば充分思慮深く、相当な年齢の人が小さなこだわりとか、いわゆる偏見でものを言ったりすると、却ってその人の人間的なものを発見した気になり、急に親しみが湧いてくるものである。特にそんな時は、欠点をさらけ出し、無防衛の状態であり、こんなこと言っただけのだからか、と聞き手が心配したりする。逆に偏見の無い人、つまり偏見を表に出さない人は信頼性に欠ける。ひとつの信念をもって生きていく人は、往々ひとつのものに対する固執がその信念を貫き通すであろうか、独善的であり、また偏見も格別である。逆にあれもこれもという八方美人の人とか、すべてに対してそつなく正当論を語り、非のうちどころが無い人は、おもしろさに欠け、決してたのしい存在ではない。

竹内は「国の独立と理想」の中で、サンフランシスコ講和をめぐる当時の論争を次のように分析している。それは、占領を屈辱として占領よりも講和をとるという明治的教養人の賛成論と、主権の全き回復を条
トラ・ナシヨナリズムに陥る危険を避けてナシヨナリズムだけを手に入れることができないとすれば唯一の道は、逆にウルトラ・ナシヨナリズムの中から真実のナシヨナリズムを引き出してくることだ」の言葉には、竹内の叫びにも似た悲痛な心情がある。この心情は中国に言及し、そしてアジアに至る中にも共通するものである。そして決して世界とは言わないし、インターナショナルとも言わない。正当論を語ることに何をも解決しないということ。そしてそこには自らの感情をひとつひとつ丹念に追求した竹内の思想の核がある。たとえば「大東亜戦争と吾等の決意」という言葉を生んだとしても、やはりこの感情に正面から向きあう必要がある。それは「偏見」にみるたのしいという表現と一体となっている問題である。ここで竹内は自らの感情を捨象せず大胆な予見を試みることを教えてくれたような気がする。